

THE HAKUBI CENTER NEWSLETTER



まだ見ぬ世界へ出かけよう。

ようこそ 新白眉センター長

巻頭特別インタビュー・高倉喜信白眉センター長。野球少年から薬学研究者へ。若手研究者への熱いメッセージ。

X/Twitter、 どう使ってる？

白眉対談・研究者のSNS戦略

Science Communication in the Light of Corona Policy

そこにしかないものを 求めて

フィールドワーカーたちの
エッセイ集



白眉センターとは

「白眉」は『三国志』（蜀書・馬良伝）の故事に由来する言葉です。三国時代、馬氏の五兄弟はすべて優秀な人材でしたが、とくに眉のなかに白毛があった四男の馬良が最も優れていたこと（「白眉最良」）から、最も傑出している人や物を「白眉」と呼ぶようになりました。

この故事に倣い、京都大学が将来有望だと太鼓判を押した若手研究者、それが「白眉研究者」です。文系理系を問わず多様な分野にわたるチャレンジングで創造性に富んだ人材を確保すべく2009年から立ち上げられた京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」では、優秀な若手研究者を年俸制特定教員（准教授、助教）として採用し、自由な研究環境を与え研究に専念させることにより、次世代を担う先見的な研究者を育成するための取り組みを進めています。

Contents

- 03 巻頭特別インタビュー
ようこそ 新白眉センター長
高倉喜信センター長インタビュー
- 08 シリーズ白眉対談^⑱
X/Twitter、どう使ってる？
細将貴/ 越智萌/ 武田紘樹/ 大貫茉莉
ゲスト・村上正行 大阪大学教授
- 17 Science Communication
in the Light of Corona Policy
- 20 そこにしかないものを求めて
—フィールドワーカーたちの
エッセイ集
虫賀幹華/ 青柳亮太/ 大谷育恵/
Mostafa Khalili/ 佐藤駿/ 西田愛/
Vu Ha Thu/ 三崎舞
- 29 ポスト白眉の日常
Knut Woltjen
- 30 Recommendations from the
13th batch members
- 35 活動紹介/ 白眉セミナー/ センター日誌
- 38 受賞/ 出版物/ メディアでの紹介・出演
- 40 第13期白眉研究者

■ 巻頭特別インタビュー

ようこそ新白眉センター長

高倉喜信センター長インタビュー

2023年4月1日、高倉喜信 新白眉センター長が就任されました。今回は白眉センター長になられた高倉先生から、ご自身の薬学研究の歩みとともに、インタビュー後半では野球少年だった時代から薬学研究に打ち込むに至った経緯や、これからの若手研究者に期待することを伺いました。



センター長と薬学研究

聞き手 高倉先生、本日はお忙しいところ、お時間くださりましてありがとうございます。高倉先生は、1981年に京都大学薬学部薬学科を卒業され、その後同大学修士課程修了、博士課程に進学されたのち、薬学部の教授としてご研究をされてきました。この間、薬学研究科長・薬学部長、京都大学副学長を務められたのち、2023年4月1日から白眉センターセンター長に就任されました。先生のご専門は薬学ですが、まず簡単に研究内容について教えていただけたらと思います。

高倉 薬学は、高校の理科で言うと、物理、化学、生物という、地学以外の全ての分野に広く関係している分野です。この薬学のうち、僕は医療系の研究室に所属していて、物理、化学、生物に関する基本的な研究を応用して実際にヒトに投与するかたちを作る薬剤学に関する研究をしていました。これをドラッグデリバリーシステム (DDS) といいます。風邪薬としてアスピリンとか飲みますよね。アスピリンというのは、化学式で書くとCHOで構成される化合物ですが、それを包んでいる錠剤とかカプセルがなかったら飲めないでしょう。それをどのようなかたちに仕上げるかというのがわれわれの古典的な薬剤学の考え方ですね。活性のある薬をどんなかたちに仕上げて、どこから投与して、それを投与したあと、体の中でどのような動きをしてどんな働きをするかということ、一連のことまで全部ちゃんと理解しないと、いくら素晴らしい薬の種が見つかったとしても、それは医薬品にはならないのです。このDDSの研究を学生から四十何年、ずっとやってきて、日本薬剤学会から学会賞をもらったりもしています。

最近ではDDSもいろいろ進化してきて、最後の10年ぐら

いやっていたのはエクソソームです。これは今、すごく世の中で注目されているものです。われわれの体内のほとんどすべての細胞は粒子を出していて、そのことが発見されたのは40年ぐらい前かな。それがすごく大事な役割をしているとわかったのが十数年前です。血液中とか唾液などの体液中に1ミリの1万分の1くらいの目に見えないつぶつぶがあるのです。それぞれメッセンジャーRNA (mRNA) とかDNAとかタンパク質がそのつぶつぶの中に詰まっていて、細胞がそれを血中に放出して、目的のところにデリバリーして到達したところで遺伝子発現を調節していたり、生理的に大事なことをしていたりすることが分かったのです。今注目されているのががん細胞で、これがエクソソームという小さい粒子を出して、近くの細胞、あるいは遠隔の細胞にがん細胞が増殖したり転移する前にそのつぶつぶを、リンパ節というところに送り込んで、そのリンパ節にいる免疫細胞に、「次、俺が行っても攻撃するなよ」というシグナルを出したりしていることがわかってきたのです。これこそが、体の中で使われている、いうなれば天然のデリバリーシステムです。これをうまく人類が利用したら、もっとすばらしいDDSになるのではないかなということで、その研究を最後10年ぐらいやっていました (図)。それは非常に夢のある話で、今や世界中の研究者がやっています。

聞き手 ちなみにこのDDSというのは昔から古く使われているのでしょうか。

高倉 古いです。皆さん知らず知らずに使っている薬でもDDSが使われています。普通、飲み薬は飲んだらすぐに溶けて吸収されていくのですが、ゆっくり溶け出す仕組みを組み込んで錠剤にしてやるというのが古典的なDDSです。これをコントロールリリースというのですが、製剤からの活性成分の放出をゆっくりにするのです。このことは、治療上大

変意味があったりします。コントロールリリースとともに DDS で大事なのが、ターゲティング、標的指向化といって、薬が行くべきところにだけ行くようにすることです。抗がん剤の例でいえば、がんの薬の分子が 100 個あったら 100 個とも、正常な細胞に行かないようにしてがん細胞だけに届けばいいのですが、それは絶対に無理です。普通に薬を飲んだり注射したりすると、アトランダムに体中に広がってしまうのです。それをどうすればいいかということでいろいろな工夫がされていて、それこそ人工の微粒子、小さな粒子を使ってがんだけに届けるという工夫がされます。抗がん剤は本来毒ですから、こうした工夫によって投与量を下げたりできる。あとは、がん細胞だけを認識する抗体に薬をつけてターゲティングする。それはもう何十年も前から試みられていて、世の中ではいろいろ薬もできています。その中でエクソソームというのは面白いなと思ってやっているものです。

それから DDS 研究というのは、実用化も広くされている技術です。一番わかりやすい最近の例は mRNA ワクチンだと思います。mRNA ワクチンの実用化には DDS の技術が欠かせないのですが、マスコミや社会ではあまり説明してくれないので、僕は講義とか講演とかで紹介しています。mRNA ワクチンは、DDS で使われる脂質ナノ粒子にパッケージして、先ほどのエクソソームぐらいのサイズにして注射すると、うまく体内に運ばれて作用します。なのであれは DDS なんです（笑）。僕らがずっとやっていた研究とすごく近いんです。

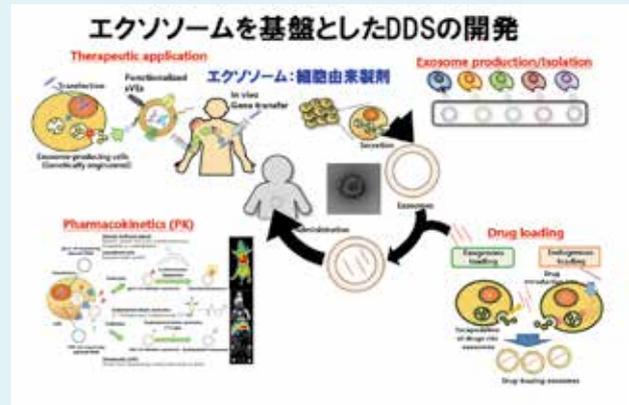


（センター長室に飾られている日本薬学会賞）

聞き手 質問なのですが、エクソソームを使ったデリバリーシステムで具体的なターゲットは何があるのでしょうか。がん細胞とかでしょうか。

高倉 そうですね。がん細胞は、がんを応援しているエクソソームを自分で出しています。だからそれを出させないようにするとか、それが送り込まれるところをブロックするとかというのが着目されています。この場合のがんのエクソソームはどちらかというと診断方法として着目されています。治療のターゲットには、まだなりにくいです。今、実際に薬になりかけているのは、それこそ COVID-19 も含みますが、抗炎症です。特に、間葉系幹細胞ってわかりますかね、それが出しているエクソソームの中に、炎症とか COVID-19 による肺炎とかを抑えるマイクロ RNA という物質がたくさん含まれているので再生医療で間葉系幹細胞自体を、免疫拒絶反応の治療などに実際にヒトに使うということが、もう数年も前から実現されています。ただ、実は細胞ではなくて、そ

の細胞が分泌しているエクソソームが活性本体というのがわかってきて、細胞をどけて分泌したものだけを集めてやるというセルフリーの治療が実用化に向けて研究されています。



野球少年から京大への進学

聞き手 ご研究について詳しく教えていただいたのですが、研究をやりたいなと思って、最初から研究者を目指されたのですか。

高倉 その話をするためには、私がどのような経緯でこの京大にきたかということもお話したほうがいいと思います。学部生のときは硬式野球部に入っていましたが、実は、高校のときにプロ野球のスカウトが来ていたんです。自慢話になるのですが、野球では無名の進学校で茨木高校（大阪府茨木高等学校）を卒業したのですが、3年生の夏の大会で甲子園の2歩手前まで、ベスト4までいったんです。今年、阪神タイガースの岡田彰布監督が目立っていますが、彼は同期で、中学から知り合いであり、ライバルだったのです。三振を取ったことも、練習試合で勝ったこともあります。私は、ピッチャーで4番でした。今みたいに何人もピッチャーがいるのではなく、どの試合も全部投げ切るかたちだったのです。大阪は7回勝たないと甲子園に行けなかったのですが、僕らのときは133校で5回も勝ちました。ベスト4にまで進んで、岡田がいた北陽高校は決勝まで進んだのですがそこで負けたので甲子園に出られなかったのです。そのあと、早稲田大学にいて評価されて阪神のドラフト1位になっているでしょう。高3のときに夏の大会が終わったあと一応大阪府の代表チームのピッチャーにも選ばれました。優勝した興国の監督が大阪大会で活躍した選手を選んで大阪選抜チームを結成、甲子園組の選抜チームがハワイ遠征に行く前に壮行試合を行う機会がありました。練習を兼ねてアメリカでちゃんと戦えるように日本でいいチームと闘う、という機会です。甲子園選抜チームには、一年下の原辰徳選手（元ジャイアンツ（巨人）監督）がいました。だから原のいる甲子園チームと対戦する岡田のいる大阪チームの代表で選ばれたのですが、辞退したのですよ（笑）。何でだと思いませんか？受験ですよ。で、結局浪人したんです（笑）。スカウトは、ジャイアンツと当時の阪急（現オリックスの前身）ともう一つの球団から来ていました。僕は直接話をしなかったのですが顧問の先生のところまで話が来たときに「彼は進学ですからプロにはならないです」と断ったんですね。

聞き手 えー！



現在まで続く野球との繋がりを示す名刺



高倉 僕もいくつもりなかったですね。たしかに、小学校の卒業文集にプロ野球選手になりたいと書いていましたし、小学校のときからソフトボール投げの記録を持っていたので、そういう素養や素質はあったのだと思いますけど。一浪して京大に入ったあと、京大は弱いチームだったので、すぐに1年からエースで、主戦で投げさせてもらっていました。大学の授業は元々出てなくて、練習が終わったあとに茨木の実家に帰ることもできたのですが親に無理を言って下宿させてもらって、夜中にお酒を飲んで、麻雀して、そういう生活がしたかった(笑)。それがすごく楽しかったです。全く勉強もせずに。でも、一応留年は嫌だなと思って、勉強していないのに単位だけは取りたいと思って、後期試験のときに無理して徹夜で勉強しました。すると、試験が終わった途端、天井がぐるぐる回り出したのです。難聴と耳鳴りもあるし、ということで実家に帰って病院に連れていってもらったら、これはメニエール病だろう、と言われましたね。京大病院の耳鼻科でも診てもらったら、その病気で間違いないと言われたので茨木の地方病院で適切な初期対応をもらったわけです。めまいの発作ってすごいですよ。もう立てないんです。慣れるまでは戻すぐらい気分が悪くなるので。そういうことで医者にはお酒と激しいスポーツはやめておけと言われ、泣く泣く1年で部活を辞めたのです。

ドクターコースへの進学

高倉 僕は大学1年のとき、ある人(同級生)にノートと、実習が始まったあとはレポートを全面的にサポートしてもらっていて、その人のおかげで卒業できる状態になったのです。その同級生は、入ったときから「俺はドクターコースに行く」って言うていて、「え？ドクターコースって何？」と思ったものです。当時、英語とドイツ語という語学は幸い自信があったけど、専門はちんぷんかんぷんだった。僕は、その人の素晴らしいノートで勉強して、ぎりぎり卒業できる状態になったのです。ドクターコースに入るきっかけになったのが、4年生での卒業研究です。これが本当に面白かった。それが、まさにDDSの研究ですよ。抗がん剤のターゲティングの研究で、先ほど言ったがんのところに集めたい、高分子に共有結合をさせて、リリースの速度などをコントロールする。主にラットとマウスを使った動物実験では局所投与とか全身投与のいろいろなバリエーションのある、そういう高分子と抗がん剤をつなぐものを作って実験をする、それが楽しくて仕方がなかったのです。

1回失敗しているからセーブしながらだけど、実験したあと、酒を飲みに行ったり麻雀する、そういう生活もやめられなかったですね(笑)。野球についても、草野球くらいならできるだろうということでそれも続けていました。薬学部では研究室対抗の軟式野球大会が行われたりしていて、1980年から40年間くらいかな、定年になるまで連続で出場して優勝を17、8回しています。私の研究室には野球の好きな学生が自然に集まるのですが、そういう人たちって研究も、すごく体力があるから頑張るのです。動物実験って結構体力が要るんですよ。それでも、徹夜で実験するのも平気でしたね。体育会なのかわからないような研究生生活でしたが、いろいろと楽しくやっていました。

聞き手 そのようななかでも先生が研究でいろいろ大変だったことはありますか。

高倉 基礎研究では、「これを解き明かさないといけない」、という苦労があるでしょう？DDS研究は、そういうことはあまりないですね。どちらかという応用的な研究ですから。でもエクソソーム研究を始めたときは、基礎的なことが余り分かっていなかったの、なかなかそれらしいものが取れてこなかった。僕自身は実験をしていなくて、准教授が中心でやっていたんですが、「なかなかうまくいきません」とみんなが言っていたときは一緒に悩みましたね。

白眉センターと若手研究者に期待するもの

聞き手 白眉センターでの時間において、白眉研究者に期待しているのはどういう点でしょうか。

高倉 今振り返ってみたら、院生のときって研究だけやっていたらいいではないですか。ドクターの途中で助手にもらって、職員ないし先生らしくないと言われながらも、皆、学生雰囲気と一緒に研究をしていましたが、准教授、教授になってくると、そういう研究に割ける時間がだんだんなくなるでしょう。それは非常につらいですね。一番自分が充実したと思ったのは、助手の途中で1年半アメリカに留学させてもらったときですね。ポスドクとして研究だけやったらいいという環境を与えてもらって、すごくよかったですね。一番上の子どもが生まれて、家族で行ったのですよ。みんな17時に研究室からいなくなるから、その生活リズムになるでしょう。特に夏、サマータイムのときなんかは、家に帰る時間はまだ明るいですよ。帰ってから子どもを連れて公園に遊びに行ったり、ショッピングに行ったり、研究どっぷりしながら家族ともすごく過ごす時間があった。帰国前、いつも行っていた公園で夕日を見ながら、もう明日日本に帰らない

といけないなと思って悲しくなりました。それははっきり覚えてますね。だから若い研究者は思う存分研究をくださいと言いたいです。白眉研究者の5年間って、自分の研究だけやっていればいいですよね。この時間を大事にしてください。あとで、あのときはよかったなと絶対に思うと思う。

この白眉センターが十何年も続いているというのは、すごく優秀な人がきて、人材を輩出して、それが認められていて、一部は京大に残っている人もいますからね。大学のミッションとして、中期的な目標もあるけれども、若手研究者の割合とか、女性研究者の割合というのは数値目標があって、それに貢献しているのは白眉ですね。だから、領域も関係なしで、日本中から世界、外国も含めて、とにかくいろいろな領域でとんがった人を連れてきて、さらにとんがってもらうというのが続けばいいと思っています。できたらそのうち一定の割合は京都大学に残って貢献してもらうというかたちが続いていけばいいなと思っています。この間、離任式のときに総長も言っていました、お世辞ではなく、本当に白眉センターはうまく回っている、そう思ってくれているみたいですよ。



聞き手 それは、前の先輩たちの、業績とか実力のおかげですね。新任としては身が引き締まる思いです。

最後になりますけれども、締め言葉として、若手、中堅研究者にこれから求められることなど、メッセージをお願いいたします。

高倉 日本を背負っていただきたいです。今、いろいろなことで日本はがた落ちでしょう。よく最近、賃金だけではなくてトップ10の論文についても、13位とか報道されていて。もう数年前だけど、僕は日本薬学会の会頭をやっていたときに、日本の科学力がだんだん落ちてきているという話をしたのです。1980年代には、科学の面で、上はアメリカ、イギリス、ドイツ、といった欧米の先進国で、その次が日本というイメージができていたのです。それが、1990年代以降に落ちてきたのでしょうか。これに関しては、やはり国が悪いのだと思います。

聞き手 科学に対するサポートが足りないという意味でしょうか。

高倉 うん。昨今の大学の法人化の話に関してもそうだし、大学に対して優しくないですよ。トップ10の論文についても、13位の日本の上には中国や韓国がいますし、インドや、なんとイランまでいます。

聞き手 それでは人材が流出してしまいますよね。

高倉 中国、韓国は目に見えて、得意な分野もあって、かけ

る予算も全然違いますので、日本からの頭脳流出もかなり進んでいるでしょう？日本のサイエンスがどうなってしまっているかなって、すごく心配しています。だから、皆さん、頑張ってください。

聞き手 サイエンスを頑張ることが人材流出の抑制につながっていきますかね。

高倉 そうです。だから、もう日本からはノーベル賞受賞者は出ないのではないかともしわれていますよね。今の短期的な評価と予算を与えるというシステムを作っているおじいちゃんたちって60年代とか70年代、好きにやらしてもらった人たちでしょう。お金がなくてもまあ研究をしていられたのではないですか。そういう状況のなかで、日本の科学力が知らない間にだんだん弱くなってきているでしょう。別に日本に異変が起きている感じはしないけど、周りが劇的に伸びているのに日本だけが伸びていなくて、むしろ止まっている状態ですから、みんな異常は感じないけど、周りを見てみたら実は異常だったということは、もうだいぶ前からわかっているのです。

また、「あとどうなるかわからない」という任期付きのポストがいろいろありますよね。こういう状況のなかで、博士課程にどうしたら学生さんたちが進学するか、という課題もあります。それでいうと、学界全体を盛り上げていこうということで、僕は、7月に薬系学会連合という組織を立ち上げました。これは、学会の集まりで、医学の分野でいうと、有名なものとして医学会連合という組織があります。その薬学系の学会の集まり、という位置づけです。医学会連合でいうと、4年に1回オリンピックみたいな大会もやっていて、百何十の医学の学会が集まって共通の問題、あるいは政策に対して、専門家、研究者、科学者として提言とか発言をするということになっています。僕が立ち上げた薬系学会連合は、薬学のなかでも、薬に関する研究をしている学会が皆さん集まりませんかという目標を掲げたものです。基礎系から臨床系まで薬学はとても幅広いのですが、この組織の趣旨に賛同してください、という呼びかけをするために説明会を2年半かけて7回やりました。設立のシンポジウムというか、フォーラムの形式でやりますが、できたら年内に行おうかなと思って準備を進めています。

聞き手 日本も、こういう感じで盛り上げていけないといけませんね。

高倉 自分を育ててくれた薬学に対しての恩返しのために行っています。こういうことはシニアがやれることだと思っているので。



(日本薬系学会連合の発足に関する記事)

聞き手 すごくいい話を聞いた気がします。

高倉 各学会、会員数が減少しているとか収入が落ち込んでいるとか言いますよね（笑）。そもそも、人口が減っていて、18歳人口も激減していて、その結果若手研究者も減少しているので、考え方を変えなければいけないと思います。

日本学術会議の仕事にも結構携わっているのですが、学術会議に関しては、特に国に対してもの申す人たちが任命されないという会員見送りの問題が、まだくすぶっていますね。コロナ対策についても分科会が様々な対策を講じたけど、その他の方針とかみ合わなかったこともあったりしたことが記憶に新しいですね。でも、世の中をよくするためには、純粋に学術的な立場からいろいろな意見を出していかなければいけないと思いますね。

今の白眉の研究も大事ですが、未来も大事ですよ。年内に、30年先の未来の学術構想を想定したフォーラムを行う予定ですが、日本薬学会からもプランを出しました。薬を開発するときは、何万人も候補の人を臨床試験して、結果についてデータを収集するのに時間もお金もかかるけれど、現在、遺伝子やオミックスも全部わかっているので、おそらく30年後にはコンピューター技術もさらに進化することで、デジタルでヒトを作り出して、デジタルで開発した薬をインプットしたらどんな反応が起こるかということが分かるようになっていないかと言われています。これをデジタルツイ

ンというのです。これを実現するためには、この10年にどんなことをしなければいけないかを考えるべきだということで、各学会からビジョンが提出されて、今度何十かのもものが採択されたのです。そのビジョンを集めたグランドビジョンというのを作って、今のデジタルワールドに関するビジョンを出したところは実行のための計画を立ててくださいということになっています。

30年後は皆さんがメインで主導する世代でしょう。今の目の前の研究も大事で、白眉の5年間は思いっきり頑張ってもらいたいというのはありますけれども、こういう未来に対する視点も持ったほうが良いと思います。今という視点も大事だけど、30年たったら世の中はずいぶん変わっていますよ。だから、20年後30年後の世の中は、あなたたちが中心だと思う視点も持ってほしいなとは思っています。

聞き手 今日は高倉先生のご研究内容や研究生活、さらにはこうしたご自身の経験から白眉センターの研究者たちに期待されるビジョンをお話いただきました。特に、学生時代の趣味から研究に至るまで、何かに夢中になるエネルギーが、魅力的な研究を生み出し、社会に還元する結果につながることを実感しました。これにとどまらず、高倉先生が、さらに未来を見据えた活動をされていることを知り、自身の学問領域に対するビジョンを考える機会になりました。本日は、大変学びの多いお話をしてくださり、ありがとうございました。



(高倉先生を囲んで、13期大貫菜里(左) 13期門田美貴(右))

シリーズ白眉対談⑩

X/Twitter、どう使ってる？



X (旧 Twitter) を活用している4人の研究者に使い方を伺ってみると、それぞれ違う立場と視点での活用戦略がありました。

研究者と社会の双方向コミュニケーションツールとして有用なX/Twitterですが、実名で使いこなすのは案外難しいと考える人も多いのではないのでしょうか。TwitterがX社に買収されて1年以上が経過し、その間に様々な仕様変更が行われてきました。そんな時期、2023年11月に開催された座談会の模様をお届けします。(担当：第13期 特定助教 大貫茉莉)

野外で見つけたもの、変わった生き物の

面白いところを発信。

(細)



動物の進化、特に右左に注目して研究をしています。普通の生命学者とは違って、非モデル生物、野外の変った生き物とかを扱っているので、それに関連して、野外で見つけたものなどを発信していくというような運用を長いことやってました。

Twitter歴は長くて、13年ぐらいかな、震災の直前に始めて、そのとき、東北大にいたんで、Twitterによる情報収集の利点を非常に強く実感して。そのあと2年間、オランダに行ってたんですけども、その間、男性一人ということで、とてもさみしい(笑)向こうからTwitterで日本との接点を維持したりとか、海外で同じようにさみしい思いもしてるおじさんたちと仲よくなったりとか、そういう使い方をしてました。で、そのあと、白眉に拾われて日本戻ってきてからも、Twitter、割と熱心にやってたんですけども、どっちかというところ、ここ5、6年ぐらいは、あんまり自分から積極的に使っていない。ちょっとSNSを卒業した側になってるのかなという気がしています。でも、たまにTwitterで報告したいこととか出るとツイートして、それなりのインプレッション(投稿したツイートがほかのユーザーのタイムラインに表示された回数)があるような感じで運用を続けているところですね。

使っていた目的も自分のキャリアに合わせていろいろ変わってきていますけれども、基本的には変わった生き物の面白いところとか、そういったものを発信する、一般の人たちに共感してもらって、あわよくば自分の何かの利益になるようなことがあればいいなというような感じで続けてきています。

細 将貴 ほそまさき @MasakiHoso

早稲田大学 教育学部 理学科 生物学専修、准教授。第4期白眉研究者。専門は進化生物学、進化生態学。特に注目している生命現象は、体制や行動にみられる左右の非対称性。

学問をより身近にするため、

基本的には面白いと思える冗談を。

(武田)



僕は、ちょうど大学3・4年生、卒論とかの時期ぐらいから、周りの人が使っているからということで始めて、普通に同級生同士でコミュニケーションを取るツールとして使ってた。最初は結構、自分の研究とか勉強してることの話をつぶやいてたんですけど、反応があまりにもよろしくない。相当自分の専門に近い人とかしか興味を持ってくれないので、このまま使い続けてもなと思ったんで、あるときからシフトして、もうとりあえず人を集めようって意識しはじめました。人を集めてから自分の研究とか勉強しててことを話せばもっと多くの人が興味を持ってくれるなって思って方向性を変えました。

普段は、基本的にはくだらない冗談をつぶやくようにしてて…最近つぶやいたのとかは、「研究者はよく休みの日だったので仕事が進んだという意味不明の供述をします」みたいなツイートして、それだけでも2000とか3000「いいね!」ぐらい。一番最近のツイートは、くだらない冗談言ってるっていっぱい「いいね!」集まるけど、果たして論文はどれぐらいの人が読んでくれるんでしょう?と言って、自分が最近書いた論文のリンクを張るみたいなことをしています。だから、基本的にはあんまり仕事として使うというより、自分の趣味としてTwitterを使う中で、多くの人たちの注意を引いて、それを経て、自分の本とか講演をするとか、そういうものの宣伝として使おうというような使い方をしてます。

武田 紘樹 たけだひろき @tomatoha831

京都大学大学院 理学研究科 物理学・宇宙物理学専攻 物理第二分野 天体核研究室、日本学術振興会 特別研究員 -PD。なお本座談会后に第14期白眉研究者として採用が決定、2024年4月より着任予定。専門は一般相対性理論、重力波物理学、相対論実験。重力波という時空の歪みの波を使って、重力の性質や宇宙の進化と起源を研究。



今みんなが知りたい、国際制度の解説。

(越智)



記録を見ると、実際に使ったのは10年ぐらい前のようなんですけど…(笑)ただそれ、私いろんな海外ニュースとかを読むんで、最初はそのリンク集として、ほぼプライベート用みたいなかたちで運用していました。

きっかけになったのは2年前のロシアによるウクライナ侵攻の後、1カ月後ぐらいの時です。私の研究テーマとも関係するんですけども、残虐な映像とか写真とかがたくさんTwitterに上がるようになって、私のようにあんまり使わない人でも目に入ってくるっていうことになっていて。それに対して、あんまり見すぎないように、見るのはいいけどなるべく心のケアをして気をつけてくださいみたいなツイートを、すごく気持ちが高ぶっている中書いたものが割と広まったのをきっかけに、これについて知りたい人がいるんだなっていうことがわかりました。

それで戦争犯罪ってこういうものですよとか、ジェノサイドっていう言葉を米国の大統領が使ったけど、それって何?っていう疑問に答えるようなツイートをしていると、メディアの人からも、どういう意味なのかわかんないってことで結構連絡をいただくようになって。そういう中で、ニュースに出てくる言葉なのにみんなが知らない、書いてる人たちもよくわかってないってまずいなと思って、Twitterのほうで解説とか条文とかをコピペするとか、それについてちゃんと書いてある記事をリンク張るみたいなかたちで、割と自分の研究っていうよりか国際制度の解説みたいなことをずっとこの2年間やってきたっていう感じです。

で、自分の研究はもう書いても全然「いいね!」とかもらえないので(笑)私、別にメディアばかりやってる人じゃなくてちゃんと自分の研究もやっていますっていうのをアピールするために自分の研究も一応書くんなんですけど、基本的にはメディアとか一般に対する教育活動のようなかたちで行っている感じになります。



左から、村上さん、武田さん、越智さん、細さん。細さんはオンラインでモニタ越しの参加。

越智 萌 おちめぐみ @ochimegumi

立命館大学大学院 国際関係研究科、准教授。第10期白眉研究者。専門は国際刑事司法(国際法、国際機構論、平和紛争論)。ジェノサイド、人道に対する犯罪、戦争犯罪、侵略犯罪といった、国際社会全体の関心事となる重大な国際犯罪(中核犯罪)に関する諸法について研究。

研究者の実際を知ってもらいたい、

身近に感じてもらいたい。

(村上)



僕は大阪の阿倍野区出身で商店街の育ちで、実家がたこ焼き屋っていう、うそみたいな本当の話なんですけど、そういうところで育ちました。なんで、Twitterは、研究者っていうのは実際こういう人ですよって知ってもらいたいなつもりで書いています。

研究分野が情報系、教育系ということもあって、TwitterなどのSNSは授業で使ったりしています。いくつか挙げますと…

京都外大にいた2010年ぐらいから、「情報社会論」という100人とか200人が受講する講義で、ハッシュタグをつけてリアルタイムにTwitterでコメントを書きってもらう授業をしていました。例えば、漫画やテレビ、マスメディアの話がテーマの日には、「読むマンガはこうやって探している」「今クールドラマは〇〇がいい」みたいな話を書いてもらったり。

京大で非常勤やってたこともあるのですが、最近の情報関係の話題を取り上げる授業で、総合人間学部の後輩の金丸さん(当時、人間・環境学研究科 助教。現在、国際高等研究院 准教授)にニコマス(ニコニコ動画に投稿されたアイドル育成ゲーム「アイドルマスター」関連の二次創作作品)を題材に授業してもらったことがあります。アイドルマスターの歴史、二次創作、ニコマスの変遷などを話してもらいました。最後に「こういうのをクラスター分析するには線形代数が必要で、ちゃんとみんな頑張ってる勉強しないとイケません、そしたらニコニコ動画とかずっと見れます」と言って、他の授業の関連性や動機づけが高まるように説明してくれました。この授業、こんな話題を扱っていいのかわからない理由で、少し炎上しかかったんですけども(笑)

研究系の話でいうと、Twitterに「統計について授業でうまく説明する方法を知りたい」と書くと統計系の人がいられるコメントして教えてくれたりとかもありましたね。

10年ぐらい前には、割と実況中継というのがTwitterでありまして、僕も学会の中でツイート要員として全国大会の様子をツイートしていただかって言われてたなあ、と。最近はまだ随分下火になりました。

ざっとですが、こういったことに使ってたという感じがします。

村上 正行 むらかみまさゆき @munyon74

大阪大学全学教育推進機構 教育学習支援部 教授。専門は教育工学、大学教育学。大学教育を対象にした教育データ分析、ICTやSNSを活用した教育、教育改善・FD等に関する研究。

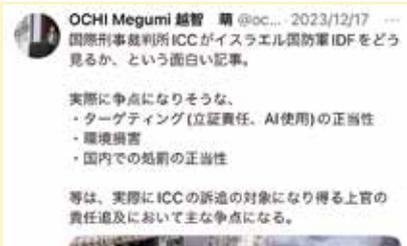
SNS やってる研究者の鑑。



大貫 研究者が Twitter をする意義についてどうお考えですか？



細 多分、僕はあまり公共の利益になるようなことは考えていないですね。自分個人が研究者個人として社会の人たちとつながるっていうことに利益を感じるのでやるという程度になってしまっています。で、その点で言うと、前々から Twitter にときどき流れてきて気になっていて、プロフィール見ると白眉ということで、お？と思ったら、それが越智さん。いや、もう大変すばらしい Twitter の使い方されているなと思って、こんなすばらしい人が白眉に後々入ってこられたんだなと思って感銘受けたんですけども、越智さんの使い方、研究者の鑑というか、SNS やってる研究者の鑑だなと思って感心して見えています。それに比べれば私がやってるの、趣味的な感じですね。あんまり公共のためにという意義を持っていないという感じになります。



大貫 ちなみに個人として社会の人たちとつながった結果、具体的にはどんな利益がありましたか。



細 直接的にはそんなに多くはないですけども、貴重なシーンを撮影してる投稿を見つけて、それについてコミュニケーションした結果として小さな論文が出たことや、あと、何だかんだいって出版物以外で研究者のことを知ろうと思ったら口コミか SNS にあたるしかないわけで、もしかしたら SNS での振る舞いなどが評価されて何らかの間接的な利益があったかもしれないですね。でも、それは多分、アカデミアからどう評価されたかっていう話であって、社会からそれで自分に利益が還元されたっていうことはあんまないかもしれないですね。講演頼みやすいとか、それは利益かどうか、ちょっと微妙なことだと思うんですけども (笑) そういう機会が増えるっていうのはあったと思いますね。



越智 ありがとうございます (笑) ありがたいことを言っていたんですけども、逆に私、細先生の Twitter 見てて、いいなってすごい思ったんですよ。自然や生物の写真がたくさんあって。あと、いろんな人から珍しい写真を共有されてたりとか、ゼミ生にすごく愛されてるとか。

そういう研究してる人、特に生物に関心がある子どもたちとか高校生とかは絶対このツイート見たらいいなって思うと思いますし、楽しそうってポジティブなイメージを、多分すごく広げてるんだと思うんですよ。で、別に細先生の研究室だけじゃなくて生物系とか理系の研究室ってこういう感じなんだなっていうのが伝わるので、そういう意味では、若い世代の人にすごくアウトリーチしてるアカウントだなと、うらやましいなと思って見ました。



細 (笑)



越智 ポジティブなイメージを素直に発するのができていいなって思ったんですよ。うまく言えないんですけども、素を出すっていうのができてらっしゃるのかなっていう。それから研究室の方も写真に。

炎上に関する傾向と対策。

越智 私、実名でやってますけども、研究のテーマにもよるのか、それとも私の性格の問題なのかもしれないんですけども、プライベートなことは、ほとんど一切書いてないんですね。そこで一步踏み出せてない感。私、2年前から真剣にやるようになったので新参なんですけども、その辺の心持ちとか、あと、承認欲求とかで気をつけることとか、そういうのは先輩のTwitterとして学べるなって思って見てました(笑)。

白眉 大貫 越智さんは教育目的みたいなかたちで使うにとどめていて、個人的なことは書かないんですね。

越智 すごくリスクがあることだっていうのはほかの炎上してる先生たちを見てよく知ってるので。特に政治的なことに関しては慎重になる部分がものすごく多くて、すごく制約の多い中で私自身はやってる意識があります。

村上 でも、越智さんのTwitter拝見しましたが、実際、いろいろ言ってくる人いますよね？多分。

越智 はい。

村上 その辺の対応とか、今、大変じゃないですか。例えばウクライナ関係の話題についてTwitterで発言したり、テレビに出て解説していると、Twitter上でいろいろわけのわからんリプライとか飛んでくるかなと思うんですけど、その辺、対応とか気をつけていることとか、何かありますか。

越智 (笑) 見れるときと見れないときがあるんですけど、あんまり気持ちよくない発言をもらうこともありますね。なので、逆に炎上経験のある先輩に話を聞いてみたいですけど(笑)

村上 そこまで炎上したことはない(笑) 僕は1996年からブログ、ウェブ日記を2019年ぐらいまでは大体書いていたんで、ある程度感覚が分かっていて、さっきのニコマスの話は燃えそうになったときに、すぐ自分のブログに「この授業は、こういう理由でやりました」みたいな感じで消火活動に入りました。あとは、ほかの知り合いとかが炎上したときに、対応は何回か手伝ったことはあって、

越智 コンサルですか(笑)

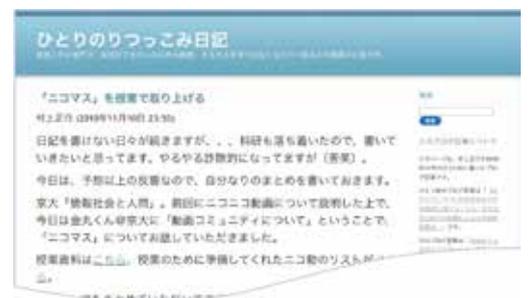
村上 いや、コンサルではないですけど。

一同 (笑)

村上 基本、ただそのまま消すとよくない、履歴を残した状態で消すということですかね。まあ、Twitterになるとまたちょっと違うこともあるんですけど、一応、基本的にブログとかにこういう理由でこは消しました、これは本当に申し訳ありません、って言って鎮火活動に入るってことをやってました。

炎上したときには、きちんと早い段階で、なるべく本意を説明することが大事だと思います。Twitterとか切り取られるんで…短いでしょ、たかだか140字。しかも、連ツイって、複数ツイートから1個だけ取られて変に解釈されるっていうこともそれなりにあるので、その部分をきちんと押さえて、真意を説明して話を治めるということをやりました。まあ、炎上もいろいろあるので、難しいところもありますけど。

村上さんのブログ。
ニコマスを授業の題材に取り上げた背景と意図を説明している。



越智 女性の研究者はそれだけで一個、弱いと思われるがちなのか、攻撃をしやすいのかなっていうのは他の炎上してる人を見て思っていて。私自身はあんまりそんな感じはないんですけど、プライベートなことは書かないほうがいいのかっていうのはすごく思ってます。なので、発信することはすごく奨励すべきだと思うんですけども、それとTwitterで見せる部分っていうのは、気をつけるべきことは多いのかなっていうのは思ってます。

…って言って、私、ネガティブなことばかり言ってしまうんですけど(笑) そうじゃなくてもっとキラキラした、

一同 (笑)

村上 まあ、Twitterはそんなキラキラはしてないですけど。インスタじゃないので(笑)

越智 キラキラというか(笑) 怖いことばかりじゃないので、楽しいことのほうが多いので。私が今言ったネガティブなことは本当一部で、すごくいいリップをもらって刺激されてディスカッションに入るとか、自分のブレインストーミングが促進されることがすごくあるんですよ。なので、なるべく読めるときは読んで、いいなと思ったやつは積極的に議論深めるみたいなことはあります。

白眉 大貫 越智さんのほうからTwitterのいい側面も聞けてよかったです。

一同 (笑)

越智 今、何かちょっと暗い感じに(笑)





大貫 武田さんはいかがですか。



武田 僕は基本的に趣味がほとんどなくて、物理と数学ぐらいしかやってなかったんですけど、強いて言うならお笑いのコントを見るのとか、冗談言い合うのが結構好きだったんで、Twitterは割り切ってもう冗談言うツールとして使い続けようって決めて。

そうすると、文の裏の裏を読む過激な指摘をしてる人がいるんですけど、僕はもうリプライ欄とかも見ないようにしています。全員にコメントを返すとか、反応したり説明したりしていると、もう時間として研究どころではなくなってしまうので。なんで、基本的には自分が面白いと思ったものを発信して、その人たちがどう思うかはその人たちに任せる。ただ、それで個人的な恨みを買ってしまって、自分とか家族とかに危害があるとか、大学に苦情を入れるとか、そういう話は当然あり得ることなんで、それだけはないように気をつけようとしています。

ただ、そういうのが気になる人、そういうのが気になって怖い、炎上とか怖いなって思ってる人は大丈夫な人だと僕は思って。そういう感覚がない人が炎上しているイメージがあるんで(笑)

政治とか哲学とかに関係してる、多くの人に共通したテーマだと、そういう攻撃を受けやすいっていうのは確かに怖いところだなと思いますけど、僕は物理のツイートをして炎上することはあんまりないと思っているので、割り切って使ってますかね。

人が集まる。知ってもらう。



大貫 Twitter使っててよかったところって何でしょう。



武田 Twitterがある程度人が集まってくるようになってから、YouTubeとか、別の媒体で研究の話をする、論文読んだ紹介するとかいうのをするようになって。そこで大学生と意欲のある高校生とかがコメントしてくれたり、どういう進路をたどったらいいですかっていうのを聞いてくれるようになったりしたの、うれしかったです。あと、子ども向けの話をしたんで本を書きませんかと言われて本を書いたりだとか、講演とか、こういう場に呼んでいただいたりとかすることは副次的にありました。けれどもそれを意図してやってたというよりは、最初はまあ趣味ですね、どっちかというところ。

僕はあんまりこういうのはしないようにしようとか、そういうのを設けてなくて、面白いと思って言いたいと思ったらもう言うようにしてます。それがSNSだし、そんなに神経とがらせないと発言できないようになってっちゃうんだったら、僕はつらいんでやめたいなと思っちゃうタイプです。



越智 でも、読んでるとすごいすっきりします、武田さんのTwitter、大好きなんで、私。めっちゃいいねも押して。代弁して下さってて、わかるっていうのは結構多い。



武田 (笑)



大貫 村上さんはTwitter以外にもいろいろな媒体を使われていて、ポジティブなフィードバックをもらっているように見えるんですけどいかがですか。



村上 そうですね。どちらかというところ武田さんとか細さんに近いんですけど、Twitterでは研究者、大学教員って身近な人です、みたいなことを知ってもらってということが割とメインです。野球が好きで阪神ファンなので、優勝したときにも、やったー、みたいなこと書きましたし、お笑い好きなので、M-1やキングオブコントの時には1組ずつ感想を書くみたいなことをやっています。対して、教育関係なので、大学ファンとも言われている国際卓越研究大学の話であるとか、そういう文教政策に対するコメントとか、いろいろ書くようにしてるという感じです。

そうやって顔も出していろいろ書いてると、大学や学会などでいろいろ仕事もそれなりにしてるんで、「むーにょさんですね」とか、声かけられます。前職の京都外大のときにも、FDとして教員研修をやったり、SDといわれる職員研修もいろんな大学に行ってやってたので、特に大学職員さんに気軽に声をかけてもらえます。ただ、職員さんは名前出さずにやってるケースが多いので、こっちは顔わかれへんから、誰なん？あぁ、あの人ね、みたいな(笑)僕は一応気にならないタイプなので、名前出して、顔も出して、こんな人ですよ、みたいな感じで知ってもらってますね。



異なる世代のメディアリテラシーの違いに配慮。



村上 ただ、やっぱりいろんな人が読んでる可能性があるものなので、大学教員ですから、その枠をはずれないように、っていうのは結構構えをつけるようにしています。気軽に誰が読んででも誹謗中傷にならないように、受け取られ方によって変に取られないように、っていうことは、気をつけてます。

今50歳で、いわゆるネット黎明期から関わっている、っていうのもあって、その辺慣れてるっていうのがあるんですけど、特に今の学生さんは当然生まれたときから普通にインターネットやSNSがあるので、この辺の感覚が全然違うっていうことを意識して大学で授業をしています。だから、さっき言ったような授業中にTwitterをやってみたいなものもメディアリテラシー教育の一環、という感じで意識してやっています。



大貫 授業でメディアリテラシーを教えていらっしゃる時、若い学生さんにはどういうことをメッセージとして伝えてるんですか。



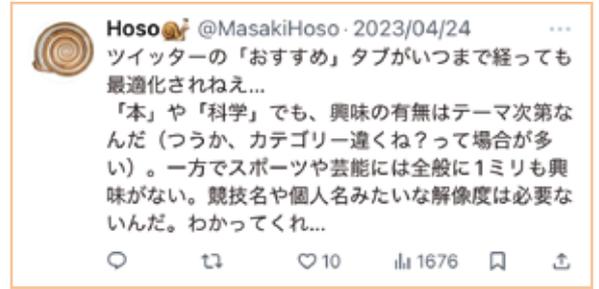
村上 実際に使って体感しないとわからないことはいっぱいあるので、授業の枠組みの中でやってもらえれば、と思います。あと、授業中に、こういうのがTwitterで炎上してますとか、こういうのがバズってます、企業さんはこういうことを考えてバズらせようとしてます、みたいな話をしているのですが、利用者の立場だけでなく、提供側の立場を考えてもらう、世の中そういう仕組みなんだっていうことを知ってもらえたらいいと思います。今の学生さんとかは特に無意識だし、CMがある理由などはピンとこないことも多いので、時代の違いを意識して説明するようにしています。



大貫 細さんはいかがですか。



細 気をつけてるっていうか、僕は炎上の経験はないので、こういうことをやめとこうとかみたいな失敗に学ぶっていうことはあんまりしてないんですけど、気をつけるのがしんどい、そういうのを気にかけてツイートしていくのがしんどいな、そういうふうなこと、気を使ってやっていくのしんどいなっていうのがあって、もうなるべく感情を出さないような感じになってきてますね。だから、さっき、武田さんがおっしゃりたいに、リプライに回答しないと、あと、越智さんもおっしゃったようなプライベートな話題を出さないというふうな、そういうのを同じように徹底してる感じがしていますね。



Twitter 上での議論は絶対避けたい。



細 でも、そんな気をつけてても、今、TwitterからXになって変わってきて嫌だなと思ってるのが、フォロー中とおすすめと二つ選べるようになっていて…



武田 そうですよ。それ、まじ嫌ですよ。



細 ね。おすすめ欄あると関連してる人たち、多分、フォロワーのネットワークから適当に拾ってきてるんだと思うんですけど、すみ分けてるはずの人たちに見つかりやすくなると。そうすると、女性限定公募とか、世代間格差とか、必ず対立軸があって燃えやすいテーマにみんなの目が向かってしまって、特定の人の発言がたたかれちゃったりとか、それに関連する発言が拾われてさらに延焼していくみたいなことがあったりして。どちらが正しいとかではなくって、短い文字数で相手を説得するとか、共感を得るとか、なかなかヒートアップすると難しいので、もうああいうのにふれないことが大事じゃないかと最近よく思います。



武田 僕もその点に関してはもう細さんと全くおなじで、ああいう本来は見なくてよかった人たちのツイートが最近見れるようになってきてしまって、くくりも多分ざっくりしてるんで、研究者っぽい人のツイートは全部、ほぼ出てきちゃうみたいな感じになっているんですよ。そうすると、本来は見なくてよかったものが見えて。そういうのに限ってテーマが結構際どい、限定公募とかそういうのが多いので、



一同 (笑)



武田 僕は意図的にもそういうのは絶対ふれないようにしています。僕もTwitterでなされる議論はもう本当に無駄だと思ってるので、あそこでやったところで何か生まれるとはあんまり思えないですし、そういう主義主張が違うものに関しては答えがなさそうだと思うので。特にXになってからは注意してます。

Xのおすすめは厄介ですね、と武田さん、細さん。



Xになって、不満はあるけれども。

細 ただ、そうすると、だんだん Twitter じゃなくて Instagram になっちゃいますよね。

武田 (笑) それは若干そうですね。だから、X になってからそっち、そういう過激な議論みたいなのに嫌悪感がある人っていうのは Instagram とか別のツールに移っているという感じはありますね。

白眉 大貫 質問がきています。「Twitter から X になって使い勝手がちょっと悪くなったと思います。武田さんや村上さんが X を離れたら自分も離れようと思っているのですが、次のプラットフォームは何がよいと思いますか。」

武田 え (笑)

村上 いや、むずいよな、これは。

武田 そうですね。さっきの細さんの話でもありましたけど、おすすめっていうかたちでほかの人のツイートが勝手に出てきちゃうとか、インプレッションを稼いでお金を稼ぐような、意味のないことをスパムっぽくばっけ書いてるアカウントとか増えたので、確かに Twitter だった頃に比べて使い方が難しくなってるのは感じますね。かといつてほかのっていうのも難しいですよ。

村上 そうなんよな。結局、プラットフォームビジネスなんで、ユーザーがたくさんいるかどうかということがポイントになるんですよ。例えば、Threads っていうインスタと連携した SNS がスタートしましたが、初期の頃は、どっと利用者増えて話題になりましたけど、今は多分、そんなにみんな書いてないんじゃないかなと。一応、僕は商売柄やってますけど、なかなか厳しそう。で、僕は使ってませんが、Bluesky っていう分散型 SNS もあります。数年前にも分散型の Mastodon っていうのがあったんですけども、結局なかなか広まらないですよ。X、Twitter、何がメリットかっていうと、やっぱりユーザーが多いっていうことなんで。

研究者に特化した SNS とかが出てくる可能性、ゼロではないと思うんですけど、やっぱり広報ツールであるということと考えたらなかなか難しいかなあ、って思いますね。もちろんインスタとか TikTok とかもあるんですけど、研究者向けではないので。

武田 (笑)



村上 ビジネスとしては、当然、TikTok を中高生にリーチするために使うって話はあるんですけど、研究者に関する内容を TikTok でリーチするっていうのは、そうそうむずかしいかなって思います。

研究者としては、今、新しいプラットフォームを使うっていったらなかなか悩ましいなっていうところですかね。

武田 僕は最近、インスタに Twitter みたいな文章を画像に上からかぶせて載っけるみたいなことをたまにしますね。インスタは広まりにくい気がするんで、プライベートに近いような内容とかも拡散されないの。だからそっちにたまにツイート…じゃない、インスタ投稿したりするけれども、やっぱり SNS は人口あってのところではあるので。X は使い勝手は悪いけれども、あえてほかのやつに行くほどでもないかなと思ってます。

白眉 大貫 様子を見ながらというところですかね。

武田 そうですね。でも、これがごぞつと別のところにくるってことは難しいと思います。

村上 正直、なかなかないと思いますね。プラットフォームに関しては、やっぱり先行者利益がすごい大きいので。いや、とはいえ、iPhone が出たときに日本では iPhone 流行らへんって言われてましたけど、スマートフォンが跋扈 (ばっこ) したので、どっかでビジネスモデルの変化とかパラダイムシフトが起こるかもしれないですけどね。現状はなかなか…イーロン・マスクが X やめますとか、言わない限りは、

一同 (笑)

村上 いや、言う可能性もあると思うんですけど (笑)、そういうことがないと、なかなか別の SNS に移行しにくいなっていうところですね。Threads、どうかなって思ってたんですけど、思ったよりみんな使ってない。

武田 思ったよりインスタっぽかったですよ。もうちょい Twitter の機能に近かったら移ってたかもしれないですけど。

村上 そうですね。あと、インスタのアカウントと紐づいてしまってるんで、別のアカウント作れないっていう。僕は研究者なんで実名であったりとか、ある程度のプロフィールは示したうえで仮名的な形で利用することが多いんですけど、一般的には完全な匿名で使いたい人って結構いるんで、なかなか移行しなかったなっていう印象ですね。

武田 だから、不満はあるけど、Twitter を使うという (笑)

村上 そうですね。使わざるを得なくなってるっていう。問題は多いんですけどね。

質問・お悩み相談

座談会出席者からの SNS・Twitter に関する質問や相談を、登壇者の4人が一緒に考えてくれました。

「配属希望の学生を集めたい。」

学生さんに研究室の存在をあまり知られていないので、Twitter で知名度を上げたいんです。」

越智 誰に届けるためにそのツールをどう使うかって、戦略的に使う必要があるんじゃないかって思ってるんですよ。本当に届けたい情報を届ける前にみんなが読みたいものを書いて、多分、武田さんとか細さんとかもやってらっしゃると思うんですけど。本当に読ませたいものは間に滑り込ませる。

武田 学生さんを集めるとかだったら自分の研究の内容をかみ砕いて説明する。で、そのアカウントに統一性があると、結構、人が寄ってきやすい。研究の話の基本してるのに、その間に眠いとか、昨日ラーメン食べに行っただとか入ると人ははずしちゃうんですよ、興味がない情報が入ってくるので。だから、自分がそうなりたいて思ったらそういう情報にフォーカスして発信し続けると自然と人が集まってくると僕は思っています。あとは見せ方を工夫すれば別に同じことをしても目の集まり方が違う。

村上 僕も京都外大のときには受験生獲得戦略を考えたり、阪大では大学院生の研究をカフェイベントで紹介したりしてきましたけど、その二つのリーチは違います。それぞれに応じてテイストを変えてツイートするといった、戦略を練っていくことがポイントになってくると思います。その辺、どういふうに使いたいかを考えるっていうことが重要になってくるかなとは思いました。

「ツイートがバズるかどうかって自分で予測できるんですかね？」

武田 それは結構わかんないですね…文体とかも結構意識してるほうだとほうだと思えますけど、これがこんなに伸びるのかっていうときもあるし、うわ、これが全然伸びてない、恥ずかしいみたいなこともある。

越智 私、一番バズったやつだと、安倍元首相が暗殺されたあとに、自宅で銃を作ろうとするだけで罰せられますよっていうのが最初に8万ぐらいになって。刑法の条文貼っただけなんですけど、それが拡散されて。なので、多分、みんなが必要とする情報みたいなやつは跳ねるんだらうなっていうのはそれですごいわかりました。

Twitter って今見てる人に届くっていうのが多分ポイントで、過去にどんなこと書いててもあんまり意味ないんですよ。今、この瞬間知りたいことだったら拡散される。

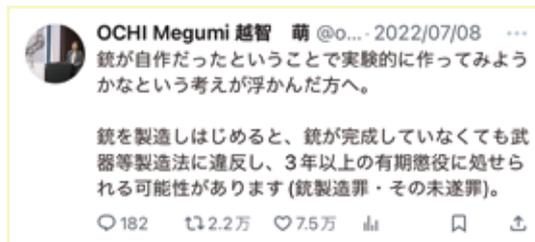
細 バズりそう、どのぐらいの数いくかなとかは大体わかる感じがしますね。でも、一般にバズってるの見てると、文章をしっかり練ってるっていうより情熱がこもってるやつとか、誤字が入ってるぐらいの思いがこもってるやつとか、そういうのがバズってる気がするので、あんまり考えてもしょうがないんじゃないかな。内容とか分野によるかもしれないですけど、写真があったほうが拡散されやすい傾向はある気がしますね。

武田 ただ研究者のキャリア、戦略という意味では、しょうもないことでバズってもフォロワーがすごい増えるとかって基本ないですよ…

細 確かに、すごく冗談じみたものでバズったあと、すごいフォロワー増えることあるんですけども、そのあと、すーって消えていきますね。

武田 そうなんです(笑)。

細 (笑) このアカウント、そういうアカウントじゃないんだみたいな感じで。なんで、多分、誰にリーチしたいのかとか、どういうキャラクターのアカウントとして維持していくのかがあっていうのが固まってるのが大事じゃないですかね。



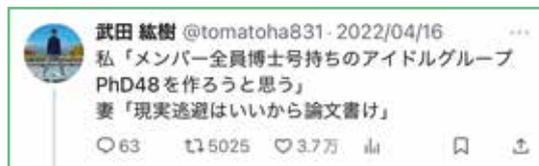
知りたい情報が、今、このタイミングっていうのは結構大事ですね



「博士アイドル化計画って？」

武田 初めは Twitter で、博士のアイドルグループでも作って儲けようかなみたいな奥さんとのふざけたやり取りを載せたのがきっかけです。

主に全国の大学院生とポスドクですけど、本当にやろうよみたいな人たちが出てきたので、有志10人ぐらいで集まって、できるだけ学問を身近にっていうコンセプトでイベントをやれたらいいよねって。早い段階で子どもたちに学問への興味を持ってもらうために、研究者の個性を出して人を集めて、そのうえで研究の話ねじ込むようなアウトリーチをしたいなって始めました。



最初は、100～200人ぐらいの全国の博士の人たちがやりたいと応募してくれて。1次審査で数十秒ぐらいの自分の自己紹介動画を Twitter に上げてもらって、その反響で選抜しました。2次審査ではピリオパトルという、自分の大好きな本を紹介する動画を取って、その反響で審査しました。最終審査として、秋葉原のUDXという駅前のホールところで選ばれた7人に「学問を身近に」のテーマでプレゼンしてもらいました。上位の人たちは academist さんっていうクラウドファンディングの参加資格を得られるっていう特典をつけて、ピッチコンテストみたいにやりました。

人が来るのかどうかっていう恐ろしさはありましたが、観客の方、100人ぐらい来てくれましたかね。親子連れの方とか、老若男女問わず来てもらえました。結構子どもが多かったの、うれしかったですね。

メディアの人からもすごい取材が多かったです。新聞社の方とかに言われたのは、アカデミアの話をニュースにしようってなると予算の話とか、論文数が減るとか、やっぱり暗い話ばっかだから、こういう明るい話を僕たちも取り上げたいんやみたいな感じだったんで、かなり好意的でした。

大貫 活動は今後も続けますか？

武田 いや、論文が書けなくなってしまうので(笑)一旦区切り。博士のアイドルであるからこそ選抜されたあとは自分たちで何とかしてくださいってことで(笑)

「広報です。いいね！がつきません…」

広報チームでコンテンツを作っているが、「いいね！」がなかなかつかない。視聴者数が伸びない。費用対効果を常に問われる中、どうしたらよいか悩んでいます。」

武田 やっぱりアウトリーチ、そういう広報とかいう観点からすると、アイデアが重要。同じことをするにしても**色々な人たちでアイデアを出し合っ**て、**トライアンドエラーし続け**ればいいんじゃないかなって。

村上 **どのタイミングでバズるかかわからない**で、**コンテンツをためとく**っていうのは結構重要だと思います。カズオ・イシグロがノーベル賞を取ったときに、京都外大にカズオ・イシグロの研究者がいて、たくさん取材やインタビューがきたんですよね。何が引っかかるか、ってわからへんと思います。一方で上層部とかに説明するための定量的なものとして、KPI、達成状況を定量的に測れる指標は、アリのバイ的には持つといたほうがいいと思います。企画を打つためには必要な、と。

越智 例えば、視聴者数 60 人って目標を設定して 70 人やったら、やったってなるじゃないですか。そういうふうに**目標設定する**っていうのはされてないんですか。

質問者 最初は無理なく数字を設定すればいいんですね。

越智 私は、**まずはトライですっていうふうにして、こういうコンテンツだったらどれぐらい集まるのかみたいな検証**してる、という感じでやります。こういうタイミングでこういうものを書くとか結構拡散されるとか、傾向を見ることを積み重ねていく。何時ぐらいにやるといいとかもありますし。

武田 **6 時、ゴールデンタイムがあるんですよ**。金曜の夜とかはインプレッションが下がったりするんですよ、みんな、もう疲れてたりする。なんで、木曜とか水曜の 4 時、5 時、6 時とか、伸びそうだなとか、多少はあります (笑)

村上 大人は帰りの電車でも見たりするんで。僕も 18 時～19 時に打ちます。

武田 **長い文章が読まれなくなってきた**っていうのは最近よく感じますね。イベントの宣伝とか、もう本当に短く端的に。かつ、僕の方法論は、なるべく多くの人が見てくれるように意識して、パッケージではかなりふざけてます。

ビプリオバトル、YouTube で動画、4、5 本上げたんですけど、それも 5 万再生ぐらい、トータルでいってる。それ、パッケージはふざけてるけど、動画を見たら普通に自分たちの好きな専門書を紹介してるだけなので、それを**普通に専門書の紹介をしますっていうふう**にツイートしたら絶対見ないですよ、みんな。

意外とそういう発信するのに興味がある研究者、結構多い。ただ、個人だとできないんですよ。一から人を集めて、企画して、宣伝して、発信するっていうのは、相当労力を使うので。本気でやりたい人たちを呼んできて、**やってあげるような場を作ってあげる**だけでもいいのかな。

村上 研究者がアウトリーチ活動をやる上で何がむずかしいって、そのアウトリーチ活動の企画などの準備に時間を割くとなったら、**研究時間が減るからあんまりやりたくない**っていう話になるんですよ。そういうイベントは別の人が企画してくれて、自分はそこで話す、くらいであれば、しゃべりたいとか届けたいって言ってる人はいるから、それをどうやって引っ張ってくるかなのなっていう気はしますね。

武田 Twitter の人たち、オフィシャル感があるものを避けるような気がしてて、今からできあがっていくもの、**このあとどうなるかわかんないものを追いたい**みたいなところがあると思う。イベントでもその場その場で決めて、みんなの反応で方向を勝手に変えるみたいなふうに見せる工夫をしてみましたね。

Twitter の人たち、最初からできあがっているオフィシャル感を出せば出すほど拒絶感を示すという、そういうところがある (笑)



「ただ眺めて時間を溶かしてしまう…」

全く自分からアウトプットしていないと時間の浪費みたいな感じになりがちです。皆さんは情報収集のツールとしてどう使っていますか？」

細 **とにかくインプットの量を絞る**。僕は論文関係、研究関係のことの有用なことだけ流れてくるようなふうに流量を調節するみたいなことをしました。量のコントロール、セルフコントロールも大事だと思います。

書く方も承認欲求がどうしても刺激されてしまうものなので、エフォートをかけたくなくなっちゃうと思うんですけども、それで自分の人生じゃないところにエフォートをかけちゃうリスクというか、コストというか、そういうものがあるので、ある程度自制して SNS と距離取ることも大事なんじゃないかなと思ってます。

自分の人生を生きましよう、ということですね。



越智 私はただ見るとはあんまりないです。**今起きてることについて詳しい人をフォロー**して、その人のやつだけを読むようにしてますし、あと、検索を結構使うので、**読みたいものを読み**にいくように能動的に使うようには意識はしてます。

村上 僕は 1 時間半ぐらいの通勤のときは結構見てるっていう感じです。どういのがトレンドに入ってるかなとか、こういうので今、炎上してんとか (笑)、バズってんなみたいな話は、授業のネタにすることもあって、こまめにチェックはしてます。

ただ、一般的に言われますけど、発信するところに情報は集まるみたいな話はありませんよね。Twitter でも、興味のある内容を書いてるとその関係で声かけてもらって世界が広がるみたいなことがありましたし。どういう情報を発信するかみたいなことを自分のポリシーでやると、**いろいろ発信することで得られるメリット**っていうのはあるのなっていうふうには思ってます。

武田 Twitter は基本的に自分が書きたいことを書く場所にしてますね。そこで情報を得るために使ってるっていう感覚は基本的にはないですね。

発信するところに情報は集まる。



村上 質問であるとか、研究で困ったこととか、ちょっとした質問とかは Facebook とかではまあまああしてますね。

武田 何か今はもう X の「おすすめ」が邪魔すぎて、(笑) 見たくもない情報、ばんばん出てきてしまうので、あれは本当見ないです。

越智 私、武田さんは「おすすめ」で見つけました。

一同 (笑)

村上 武田さんのツイートは出てくるからな。

武田 イーロン・マスクの成果ですね、それは。

一同 (笑)

Science Communication in the Light of Corona Policy

Risks and Opportunities of a Good Idea

Pascal Lottaz

Talking with the general public about academic research, scientific results, and insights into the working of abstract subjects is a great thing to do. It satisfies the interest of the lay population, helps people to take informed decisions, and makes sure new generations chose an academic path to carry on scientific work. However, there is danger associated to it, too. As all communication can become propaganda, science communication, too, can mutate into politicized speech. Just as scientific research can become ethically untenable when abused with malign intent—like for the production of weapons or when infringing on human rights—the communication about science, too, can be abused. This article explores the two sides of the communication coin based the example of science communication about Covid-19.

Can Science be Followed?

Follow the science! Ah, words of wisdom. If there was a dictum summarizing the three covid years, it might well be this one. Didn't the pandemic really drive home the importance of science and effective communication about it? There are wise men and women in society who, through many decades of laborious work with microscopes, quantum computers, and mathematical modelling are able to decode the fabric of reality and tell mere mortals how to live a life that's safe—a life that's good. The United Kingdom literally called its government appointed group of experts in charge of pandemic response "SAGE" (Scientific Advisory Group for Emergencies).¹ Isn't it nice to have sages in society? And all we need to do is make sure we have effective communication about the sages' findings to create an enlightened approach to all kinds of problems. Lovely.

Sadly, there are a few pitfalls to this approach. First of all, science, as the philosopher Michael Esfeld correctly pointed out,² is a descriptive endeavor, not a normative one. Science answers the question "what is X", it doesn't answer "what should X be." The difference is crucial. It means that there is no

build-in mechanism in science that would allow for establishing scientifically whether we should do something or not. The normative component—the should—is extrinsic to science. It needs to be sought elsewhere, in the realm of politics, philosophy, or maybe even theology.

This leads directly to a second fundamental aspect: not all fields of academics are actually "science" in the strict sense of the term. Philosophy is not, history neither, most of the humanities don't qualify. "Social scientists" have claimed the label but are rarely able to use scientific methods with the same precision and rigor as many "real scientists" in the natural sciences can. The core-scientific method—observation, hypothesis, experiment—relies crucially on the existence of an observer independent reality and the reproducibility of experimental results. For many social scientists—especially the ones working on higher levels of abstraction—experiments can't be run, or they are not controllable because of too many lower-level intervening variables.

Even natural sciences suffer from issues that make their findings murky. Knowledge is never complete, experiments might have gone wrong, data could be corrupted, and most significantly, models might suffer of flaws that only over time can be discovered. Newtonian physics was not wrong, but Einstein's theories are able to describe physical phenomena in a more comprehensive way. Hence his theories of general and special relativity superseded Newtons understanding of the world.

This makes the rallying cry "follow the science" ring quite hollow. What science are we supposed to follow, one might be tempted to ask. And when did science become a singular anyhow? Doesn't the scientific endeavor live off the plurality of voices, the possibility of dissent, and Descartes method of the doubt? If science mutates from an inquisitive and inherently speculative discipline to an authority-driven endeavor creating normative frameworks for how people should behave, is that still what we want

1 "About Us," Corporate Information, Scientific Advisory Group for Emergencies (SAGE), accessed October 17, 2023, <https://www.gov.uk/government/organisations/scientific-advisory-group-for-emergencies/about>.

2 Michael Esfeld, *Science and Human Freedom* (Cham: Palgrave Macmillan, 2020).

science to be? Or might it even destroy the nature of academic inquiry?

Science Communication and Uncertainty

What the corona pandemic lay bare is not so much the need for proper science communication but that there is something innate in the human psyche, a craving for the comfort of authority, especially during times of high uncertainty and public anxiety. There is a longing for abnegating decision making and personal responsibility to some form of abstract principle, interpreted through a cast of wise people—sages—who tell us how to behave, where to go, and what to do. Science can (and in this situation indeed did) serve that purpose. It is no wonder that in a civilization that likes to look at itself as enlightened, the very principles of enlightenment would start filling the cognitive and emotional spaces that other paradigms used to fill in older times—god, king, or the nation.

In such an environment, the communication about science can gain propagandistic qualities. The breaking of normative recommendations that some scientists make is removed from the realm of personal choice and decried as anti-scientific (“wear a mask! You science denier!”) and in the worst case, criminalized. Abstract scientific concepts are deployed to justify concrete political action (“the virus forces us to do this”). Entire social systems are changed, based on scientific models—or the idea thereof—and the political will to counteract their conclusions.

Just think of the many schools around the world that were closed for months on end to prevent the spread of the virus in children, even after it was discovered that they were the least vulnerable demographic and at the real risk of creating psychological trauma. Or think of China’s obsession with a zero-covid policy to eradicate the virus, which was supposed to be better for society than the alternative of living with it.

And remember the vaccine discussion like the “vaccine passports” that became a requirement in many countries or the highly toxic debate about introducing mandatory vaccination and the many people who lost their jobs in one country or the other because they refused to budge. The entire logic for these policies was built on the assumption that the vaccines would stop the spread of the virus—a claim

that was told for nearly a year after the introduction of the first vaccines and collapsed spectacularly under its own weight when it became evident that even people with several “boosters” (as repeated vaccinations came to be known) could catch and spread the SARS-Cov-2 virus.

Or who could forget Japan’s unique idea that virus transmission could be slowed down by forbidding alcohol consumption in restaurants, leading to a one-year prohibition during which alcohol in restaurants became a sanitizing delicatessen for customer’s hands only. This idea, too, it seems, might not stand the test of time,³ and has not been adopted by any country other than Japan.

Passports, mandates, school closures, zero-covid, alcohol-ban—all of them so called “Non-Pharmaceutical Interventions” (NPI)—were mostly based on the recommendation of SAGE-like government-appointed scientific panels and quite often presented as absolutely necessary for public safety and yet they turned out as—well, let’s call them “incomplete.”

And this should come as no surprise to any academic. Haven’t we all found out years after publishing something that part of our understanding at the time was wrong or incomplete? Or that we that we simply hadn’t asked the right questions at the time?

Politics and Science Communication

“Follow the science” never was about science. It was about politics.

The idea that scientific results are absolute and that they only need to be explained correctly and succinctly to the general public to illicit some desired behavior (wearing masks, taking a vaccine, staying at home, etc.), or justify the political crack down on those who don’t follow, was always just that—a political persuasion tool. It might have been such a tool for a very important and justified higher cause, but still, it was a political act, not a scientific one.

“Science” became an authoritative argument for the justification of a political control and the act of science communication was an essential component of this process. I’m not saying that this was inherently wrong. I’m only claiming that this is what

3 Junko Kurita, Tamie Sugawara, and Yasushi Ohkusa, "COVID-19 Infection risk posed by drinking alcohol at restaurants or bars in Japan," medRxiv (2021), <https://doi.org/10.1101/2021.07.29.21261358>.

the nature of the “follow the science” aspect of the corona pandemic was.

Now, where does this leave science communication? Should it be abandoned? Should we stop using outreach to talk with the general public about our findings and insights? Keep it all to ourselves and our little expert communities?

No, of course not. As publicly funded (through government grants, university subsidies, and the fees of our students) we have an obligation to make our work accessible to as many people as possible and be as useful to the public as we can. Societally, it is our job to contribute to the advancement of humanity and as such we owe the public access to our work—including access by simplifying and explaining.

But if the Pandemic experience teaches us one thing, it is that this process of talking and explaining complex interactions needs to happen with humility and a healthy amount of self-doubt. Our findings might be wrong, our research might be incomplete,

our models might be off. This has to be part of the communication, too. We need to make sure that the public doesn’t mistakenly think we know everything about anything and that we are infallible.

Most of all, we need to be vigilant about instances when political actors might want to use our research for political ends—especially when our results are supposed to justify actions to modify behavior in large groups of people. This is a bright red flag that we need to be very, very careful not to miss. If you are called to a “panel of experts” ask yourself is there a political agenda behind the panel? Who are the other people on the panel? Is it supposed to influence people? Is there a diversity in the composition or are all experts from the same school of thought?

Just as scientists are not immune to propaganda, science itself is not immune to propagandization. It is part of our job to recognize when this might be happening and make sure our communication about science serves the purpose of empowering people through knowledge, not indoctrinate them.



そこにしかないものを求めて

——フィールドワーカーたちのエッセイ集

はじめに

虫賀幹華

第13期 特定助教(文学研究科)

2008年の正月、私は北インドのヒンドゥー教の有名な聖地であるバナラス（バナレス、ヴァーラーナシー）にいた。ガンジス川沿いに南北約7km続く階段状の沐浴場があり（写真1）、「世界の主」という名のシヴァ神が座すこの聖地は、その聖域内で亡くなれば解脱できると信じられている。インド中から遺体が集まる特別な火葬場は「真珠の耳飾り」という名の沐浴場の一つに位置し、「世界の主」の寺院のほど近くにある。死という忌み嫌われる現象が、聖なるものに近接していることに大きなカルチャーショックを覚えた。また当時、私には闘病中の祖母がいた。火葬場で立ち昇る煙を見ながら、祖母の身を案じていた。私がインドに旅立った直後に彼女が亡くなったことを知ったのは、1週間の旅を終えて帰国したあとだった。こうした個人的な体験もあって、私は、インドと聖地と死というものを関連付けすぎてしまったのだと思う。「『死』の聖地バナラス」という題名の卒業論文を書いて修士課程に進んだあと、毎年インドを訪れながら、ヒンドゥー教の聖地と死者・祖先に対する儀礼の研究を続けてきた。



（写真1）ボートから撮影した階段状の沐浴場。

現代のヒンドゥー教徒の信仰の実態に関心がある一方で、研究を始めた頃に師事していたのがサンスクリット文献学の先生方であったという偶然も重なって、文化人類学など現代研究の方法論を取ることにはなかった。学部生の頃からインドに留学するまで7年間在籍していた宗教学研究室は、対象も方法も自分で決めよという方針で、興味の赴くまま自由に研究することが許されていた。さまざまな時代のサンスクリット語文献の記述の分析をしながら現代までの変遷を辿るという研究手法に問題があることも少しずつわかってきたが、現代の姿を文献のなかに、文献の記述を現代の営みのなかに見つけ、相互の関連を発見することが何より楽しかった。問題点を解消して、現代インド研究あるいは古典文献学というどちらか一方の視点のみではない包括的なヒンドゥー教史研究の方法を示すことは、私の白眉プロジェクトの背後にある大きな目標である。

2014年の夏、北インドの大学の博士課程に入学した。最初

の20ヶ月間は、祖先の供養に良いとされている「ガヤー」という聖地で調査し、その後3年以上、ガヤーの宗教史を主題とする博士論文を書きながらインドに滞在した。聖地や、死者と祖先に対する儀礼の調査だけでなく、ヒンドゥー教徒たちと暮らし、お祭りを一緒に楽しむなかで、ヒンドゥー教とは何かを少しずつ理解していった（写真2）。2019年秋、留学からの本帰国時にはインドからの往復航空券を買い、3ヶ月後に再びインドを訪れた。この滞在中に、新型コロナウイルスが世界を騒がせ始めた。両親からの懇願もあり、当初の予定を切り上げ、日本航空の高額な片道切符を買って、「コロナ感染者が日本で確認される前からインドにいる」と説明して宿のキャンセルを免れつつ、逃げるように日本に戻った。



（写真2）調査地ガヤーの大家さんと一緒にホーリー祭を祝う。

帰国後、ポスドクの研究場所として選んだのは京大のインド古典学研究室であった。サンスクリット文献学を一から勉強し直そうと思っていたので、インドに行けないことはさほど問題にはならなかった。しかし1年たち2年たち、文献のなかのインドだけでは満足できない自分がいた。私は、「生きられた宗教」が好きなのであり、人びとの営みを観察し、話し、試行錯誤しながらそれに近づこうとする過程そのものを愛してやまないものである。知的好奇心は湧き立ってこないが、研究発表や論文というノルマを自身に課すことでなんとか研究を続けていた。まわりが海外渡航をぼちぼち再開した頃に妊娠し、2023年夏には娘を出産した。そうこうしているうちに、インドに行けないままもうすぐ4年が経とうとしている。娘は可愛いですが、インドに行くことでしか解消できない私のフラストレーションはたまったままである。

前置きが長くなってしまった。白眉には、さまざまな分野でフィールドワークを活かした研究を進めている研究者がいる。未知との遭遇によるワクワク感に飢えている私の、さまざまなフィールド話を聞きたいという個人的な動機がないといえば嘘になるが、フィールドワークを中心にした研究紹介を複数並べてみるのは面白いだろうと思い、次の7人にエッセイの寄稿を依頼した。そして私自身は全く対応できなかったコロナ禍と、再開後のフィールドワークについても含めてもらうようお願いした。

氏名	専門分野	主要調査国	調査対象
青柳亮太	生態学	マレーシア	熱帯林の生態
大谷育恵	考古学	モンゴル	匈奴時代の墓と城址
Mostafa Khalili	政治人類学	イラン、トルコ、イラク	クルド人の民族意識
佐藤駿	進化生物学	ザンビア	カワスズメ科魚類
西田愛	歴史学	インド、ブータン	チベット語の岩石碑文／チベット語占い文献
Vu Ha Thu	開発経済学	ベトナム、スリランカ	農業技術導入促進のためのネットワークに基づく介入策
三崎舞	社会人類学	仏領ポリネシア	キリスト教とナショナリズム的社会的運動の関係



生態学とボルネオ熱帯林

青柳亮太

第12期 特定助教(農学研究科)

生態学を志したきっかけ

映画「Jurassic Park」の中で、本物の恐竜を目の当たりにした古生物学者が、口をあんぐり開いて驚くシーンがあります。巨大な恐竜の筋肉の動きや引きちぎられる植物の音に、生物進化の壮さを感じさせるものがありました。この映画が公開されたのは私が小学生の時ですが、そのシーンを見た時の感動は今でも残っています。度肝を抜くような未知のものに触れて生きていきたい！この感動が研究者になろうと考えたきっかけだったと思います。ただ、研究内容としては、生物の痕跡を対象とする古生物学ではなく、生き様を研究する生態学を志しました。「生きる」というところに、生物の生物たる所以があり、そこに「生物とは何か」という大きな問いの答えが隠されているのではないか、と思ったのです。

ボルネオの森と研究

私が対象としている熱帯林での調査研究は、たくさんの未知の経験と驚きを与えてくれます。例えば、桁違いの生物多様性の高さ、圧倒するような樹木の巨大さは、日本人のもつ森のイメージとは大きく異なります。私の研究は、こうした多様かつ巨大な森が人の手によってどう変化するかを、衛星画像という宇宙からの「目」を用いて明らかにする、というものです(図1,2)。衛星画像や機械学習などの情報科学技術によって、これまで不可能だった大きな空間スケールで熱帯林を観測することが可能になりつつあり、熱帯林をより深く理解することに繋がると期待しています。



(図1) 見渡す限りのオイルパーム農園。パーム油は、全世界に出荷され商業用の油として現代社会を支えている一方、熱帯林破壊の原因ともなっています。



(図2) 過度の伐採によって森林が草原に変わってしまった地域の様子。シダ植物の繁茂によって樹木が定着できなくなっています。森林は再生可能な資源と捉えられることが多いですが、森林を持続的に利用するためには、森に対する深い理解とその場所に適した利用が必要であり、決して簡単なことではありません。

衛星画像解析から予測される森の状態を確認するために、泥臭い植生調査が必要です。衛星画像の中でランダム点を発生させ、車、ボートを使いつつ、時には林内でキャンプをして、とにかくその地点まで行き、生えている樹木の名前、サイズ、多様性を調べています(図3)。密林での調査はゾウ・蛇・昆虫など危険な動物も多いため、森をよく知る現地の村人と一緒に行動します。異なる文化を持った人々と時間が過ごせるのは、フィールドワークの醍醐味でもあります。熱帯の村人というと、裸で暮らしている人々を想像されるかもしれませんが、実際にはボルネオの森林で暮らす人々もスマートフォンを持っており、文明の影響は人里離れた奥地まで届いています。しか



【図3】 野外調査の様子。とにかく森の奥地に行ってその植生を調べるといふ調査をしています。写真は、巻尺で木の太さ(サイズ)を測定しているところ。

し、同時に、日本とは隔絶した何かが垣間見られることがあります。例えば、現地の人々のナタ・紐など道具を使う技術、動植物に関する知識、GPSなしに森を歩き回るセンスは私には真似のできないものです。マレーシア・サバ州の山間の地域の人々は、一昔前は首刎り族として知られており、首を切る木剣や人間の首を軒先にかざる風習について、教えられたりしました。近代文明が導入されることで、人間と自然との関係がどのように変わっていったのか、これは私の近年の興味でもあります。

コロナとフィールドワーク

2020年初旬頃から始まったコロナウイルスのパンデミックの期間、私はそれまでに貯めたデータを解析することで過ごし、相対的には大きな影響を受けなかったと思います。しかし、パンデミックは研究室の「文化」に強く影響を及ぼしたと感じています。私が学生時代から所属している農学研究科の森林生態学研究室では、パンデミックの期間、学生は熱帯研究を諦めざるを得ませんでした。熱帯での調査を行うためには、資源調達や移動、コミュニケーションなど、様々な現場の知識が必要ですが、熱帯研究をしている人がいない世代が続いたことで、これまで受け継がれてきたノウハウが途切れてしまったことを感じています。今はそうした文化を再生できるように、学生らと熱帯研究を再開しつつあるところです。実験機器や解析の知識だけでなく、現場でのノウハウや人とのつながりが実は研究室の重要な財産であることを実感できたことは、もしかしら、とても大事な経験だったのかもしれない。

モンゴル国で匈奴の形跡を探して

大谷育恵

第12期 特定助教(人文科学研究所)

白眉研究のテーマ「考古資料に基づいた漢対匈奴交渉と匈奴社会の解明」の一環として、2022年夏からモンゴル国北部のセレンゲ県エロー郡で発掘調査を行っています。

司馬遷が編纂した『史記』などに記録が残る匈奴は、紀元前3世紀頃から紀元後1世紀にかけてモンゴル高原を占めた北方遊牧民族で、前漢前期には漢をもしのぐ勢力を持っていたといわれています。漢人の目からみた匈奴の歴史や習俗は上記『史

記』などの史料で伝わっているものの、どのようにして「草原最初の遊牧帝国」といわれるような強力な政権を築いていったのか、実際の匈奴人の生活がどのようなものであったのかなど、その実像については不明な点が多くあります。したがって、2022年夏にはこれまで調査が手薄であったセレンゲ県で匈奴時代の墓の調査を行って、その埋葬習俗を確認すると同時に、そこに葬られていた人の健康状態や身体的特徴を人骨の分

析を通して明らかにしようとしています。そして2023年夏からは、その付近で新たに発見した城址の発掘を開始し、匈奴人の生活の場であった城内の住居址や壕の調査を行っています。発掘調査期間中は、遺跡付近の草原にゲルとテントをたてて、降雨時以外は何かしら発掘調査や生活環境維



墓を発掘中(2022年)

城址の調査中(2023年)

持の仕事のある忙しい時間を過ごすことになります。

幸いにも2022年度夏からは発掘調査が実施できたものの、白眉に採用された2021年10月には新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、先が見通せない状況でした。考古学は発掘調査を通して新たなデータの取得と蓄積を進めてゆく必要がありますが、その基礎作業の部分はリモートワークに置き換えることは困難です。ようやく移動の制限も解け、研究交流を再開してゆけると思った2022年の夏でしたが、冬からはロシアのウクライナ侵攻が始まり、予想していなかった事態に直面しています。匈奴の遺跡の1/3は現在のロシア連邦ブリヤート共和国内にあり、同地はまた動員を巡って揺れています。発掘調査では、モンゴル国で考古学や歴史を学ぶ大学生も作業員として参加してもらっていますが、様々な事情でモンゴル国へ逃れてきている学生も雇用しました。当初思い描いていた5年間の研究計画のとおりとはなっていませんが、研究を継続できていることを幸せに思っています。



食事の準備中

Everyday Ethnicity of the Kurds in the Tri-Border Areas of Iran, Turkey, and Iraq

Mostafa Khalili

13th Batch, Assistant Professor (Center for Southeast Asian Studies)

Spread in the four countries of Iran, Iraq, Turkey, and Syria, the Kurds comprise the biggest ethnic group in the Middle East without a state. Since the formation of the modern map of the Middle East in the aftermath of World War I, they have been engaging in various forms of resistance movements against the suppression of their ethnocultural and political rights in any of the states in which they reside. While their struggle for self-determination has been mainly confined to the state of their origin, there has always been a strong cross-border spillover of the movement in various ways, from transnational solidarities and the flow of refugees to the politicization of cross-border ethnoreligious ties.



Lalish, a holy village in Northern Iraq (Iraqi Kurdistan)
Olive oil jars inside the holiest Yezidi temple

My research trajectory in the last six years has focused on taking a bottom-up approach toward comprehending the perception of Kurdishness among the borderland people re-

siding in the tri-border areas of Iran, Iraq, and Turkey. Inspired by the recent developments in the field of ethnicity and nationalism, my project aims to comprehend non-political actors' positionality in the contagious cross-border politics of Kurdistan. Methodologically, I primarily rely on participant observation, informal talks, and unstructured interviews to understand when ethnicity and nation consciousness appear and disappear in the daily interactions of borderland dwellers.

Not surprisingly, access to the field and gaining the trust of interviewees has been the major challenge for my fieldwork since most of the Kurdish residing areas are highly securitized. Though I am from Iran, I am not of Kurdish origin and only had little contact with them prior to the start of my research. As soon as I initiated the fieldwork during the first year of my doctoral course, I realized that I needed to establish a solid local network in all of those overtly politicized and securitized regions, where the locals are usually reluctant to mingle with a stranger. Thanks to some academic trust networks, I managed to initiate my primary contacts and gradually found my way to spend almost one year in the field during my doctoral course. I had planned to conduct another round of extended fieldwork during my postdoctoral fellowship starting in February 2020, but I could not travel to the region due to the COVID-19 travel restrictions. It was indeed the most challenging time for my research as a fieldworker, and I became so upset that I could no longer improve my work. However, I managed to stay connected with my local

informants via various social media apps and used my research grant to hire some assistants to collect the data I needed. Of course, it was not an ideal situation, but it eventually worked well for me.



Urmia City, West Azerbaijan Province, Northwestern Iran Working on the map of Kurdish residing regions with some local assistants

Another critical issue that I have been dealing with since the beginning of my research is the ever-changing security situation in the field and the possibility of traveling or staying in the region. When I reside in the field, I have to observe regional and local political situations closely, and as soon as

the armed tensions between the states and Kurdish militia groups get tense, I rapidly change my location or halt the fieldwork. Moreover, prior to my trips to the field, I have to apply for special permission from the Hakubi Center and my host institute at Kyoto University, as my entire focus region is classified under a high-level travel risk area by Japan's Ministry of Foreign Affairs. At the moment, due to the intensification of the Israel/Palestine conflict and the prospect of its regional spillover, there is a high possibility that my next year's fieldwork plan will be affected. Accordingly, I might again think of relying on my experience during the COVID-19 time to activate my local network in case I am not able to travel in person.



Margawar rural district, Northwestern Iran, border with Turkey Friday prayer of the Kurds in a Sunni mosque

アフリカで調べる魚類の社会

佐藤駿

第13期 特定助教(理学研究科)

僕は修士課程1年の時から東アフリカ・ザンビア共和国の北部に位置する古代湖タンガニカ湖で野外調査を行っている。僕はザンビアが大好きである。その理由はなにより、カワズメ科魚類がタンガニカ湖には250種以上生息しているからである。カワズメ科魚類オタである僕にとって宝石の海で泳ぐ気分である。また、ここにいると時間の流れがゆっくりと感じられる。1日の半分が停電になることもあり、メールの返信を忘れていても怒られることもない。独特の包容力があり、JSPS(日本学術振興会)の特別研究員に落選した時には、湖に向かって「ふざけんなァァ」と叫んだが、そこに住むサカナも現地の友人も優しく受け止めてくれた。ような気がする。

現地には日本人調査隊が拠点とする研究所があり、そこからタンガニカ湖沿岸の各調査地

に向けて船で行き、潜水調査をするのが通例だ。昨年の調査では、現地の漁師が使う木製の手漕ぎボートに潜水器材を積み込んで、調査に向かった。湖の上をちんたらと、風に吹かれ、波に揺られ、スマホから流れるYo La TengoのTom Courtenayを聴きながら船を進めることは、形容し難い多幸感をもたらして

くれる。しかし、このボートは調査地に着く前に水没し始めた。船の手配を頼んだチャンマ氏はかなりオンボロの船を持ってきたようだった。なんとか陸地に辿り着き、油の染み込んだ布を水漏れ箇所押し込んで補修し、タイタニック号と命名した。ちょっとウケた。このチャンマ氏は今年で9年目の付き合いで、日本人調査隊がタンガニカに到着するとフラフラとやってきて、調査を手伝ってくれる。もう70歳近くで、ローデシア紛争には少年ゲリラとし



現地スタッフのお家に行った時の写真



タイタニック号から水をかき出す
チャンマ氏

て従軍したらしい。森の中で煙を立てず敵に見つからないように酒を蒸留する方法を教えてくれた。現地の友人とはここでは語りきれない思い出がある。いつまでもみんな元気でいてほしい。

いま僕はコロナ禍で二年間フィールドワークを行えなかったからこそ、その尊さを感じている。フィールドワークの意義は、言うまでもなく生物がそこで生き

ているからである。生き物が生活する場に研究者自身が赴き、彼らを観察し、定量化することはダーウィン以前から連なる生物学の基本である。また、研究の対象となる生物と同じ空気や水、ときには食べ物すらも共有することで得られる我々の“自然観”は、生物学の発展になくはならないものである。しかし、こうしたフィールドワークは今、世界中で冷遇されている。それだけでなく、フィールドワークには多くの危険が伴う。日本でも潜水調査中に何人もの研究者が命を落としてきた。リスクを負わないという意味決定がなされるならば、今後フィールドワークはやらない方がいい、となっていくのだら

う。

さらに、僕のように海外でもフィールドワークを主とする研究者にとって、コロナ禍のように国際情勢もそのキャリアパスに大きな影響を与える。このエッセイを書くにあたり、白眉同期の虫賀さんからは「コロナをどう乗り切ったか」書いてほしいと言われた。が、客観的にみて僕の場合、乗り越えることはできず、コロナ禍という未曾有の災害に打ちひしがれ、アフリカに行けないという事実で絶望し、鬱っぽくなり、ずっとPCゲームをしていたら、いつの間にかコロナ禍が終わろうとしていた、という具合だ。僕はずっとここに居たい（このエッセイはアフリカから書いている）。僕にとってフィールドに出ずに生物を理解することは不可能である。イヤだイヤだイヤだ。フィールドワークができないなんてイヤだイヤだ。



調査風景

コロナ禍での海外渡航の記憶 —はじまりから現在まで—

西田愛

第11期 特定准教授(人文科学研究所)

2020年2月19日、調査のためにインド北東部に位置するアッサム州へ向かった。インド工科大学グワハティ校の協力のもと、アッサム～東ブータンのチベット仏教寺院で調査を行うことが目的であった。日本では、ダイヤモンド・プリンセス号内でのCOVID-19感染が報告され、横浜港に停泊中の船内に隔離を余儀なくされていた乗客らが、ようやく病院へ搬送されるシーンが繰り返しテレビに映されていた頃である。立ち寄った経由地のバンコクでは、すでに検温や消毒などの対応が各所に敷かれ、公共交通機関では旅行者にマスク着用を求めるなど、やや緊迫した空気が漂い始めていた。

アッサムから東ブータンへ陸路入国し、移動も調査も順調に進んだ。しかし、調査の後半から日本帰国までの1週間は、一日に数時間だけアクセスできるwifiを利用して最新の情報を入手するのに苦労した。隣国インドでは入国に関する制限がかかりはじめ、帰路のタイ-日本間のフライトとインドでの宿泊予約が取り消された。万一に備え、予定を繰り上げてインドへ再入国すると、間もなく、インド入国管理局によって日本人のビザが無効化された。インドに再入国できなければ、ブータンの国際空港所在地まで二日間の陸路行程をとり、タイへ空路移動するほかなかったと思う。新たな航空券、ビザの再取得が必要になるほか、ブータンでは一日につき200～250ドルの公定料



東ブータンのタシガンゾン



インド北西部の家庭での食事

金を支払わねばならず、余分な労力と出費を伴うところであった。こうして、慌ただしく帰国した3月初旬、日本への入国にはまだ何の制約も条件もなかった。

白眉に着任したのは翌年の1月1日のこと。最初の1年半は予定していたフィールド調査ができない状況が続いた。インド北西部に散在するチベット語岩石碑文の研究を課題としているため、フィールド調査による録文の採集は必須であるが、それができなかった。この苦境を支えてくれたのは、同地で長年現地調査を続けているフランス人考古学者の協力であった。実は、私の研究テーマは彼が近年発見し続けている岩石碑文の情報から着想を得たものであった。2019年の国際学会に同席した際、共同研究についても話し合う機会を持っていたことがうまく運び、彼が発見した岩石碑文の写真データを全て共有してくれることになった。こうして、しばらくの間は写真から録文を抽出するという予備調査に時間を費やした。

そして、2022年7月以降、さまざまな制約つきで、国際学会への参加やフィールド調査が再開できるようになった。そこからの2ヶ月間、各国の入国管理局の対応が目まぐるしく変わる中、3回の海外渡航を実施した。入国・出国前のPCR検査、入国先ごとのアプリケーションの入手と登録など、気を張っていないとうっかり忘れてしまいそうな手続きが山積みだった。日本では2023年の春まで継続的に水際対策がとられていたが、

インドは2022年の9月末の段階で、こちらが拍子抜けするほどに何の制約もなく入国ができ、空港も街中も以前と何ら変わらない様子であった。調査地のインド北西部では、外国人観光客に変わって国内のインド人観光客が増加したおかげで、観光や外食などの産業に従事する人々も仕事を続けられたとのこと。2023年に同地を訪れた際には日本人を含む多くの外国人観光客を目にした。前年の調査時には、万全の感染予防対策で渡航するよう大学からも念を押されていた。標高3600mを超える低酸素地でマスクをつけて岩を凝視している日本人の姿は、現地の人にはさぞ奇妙に映っていたに違いない。



インド北西部での岩石碑文の調査

Economics Fieldwork: From Theory to Reality

Vu Ha Thu

13th Batch, Assistant Professor (Graduate School of Economics)

1. Why Fieldwork?

A research hypothesis can be formulated from existing literature and research experience. However, data is often needed to test it. Researchers can use primary data and/or secondary data. Fieldwork is necessary to collect primary data. In addition, fieldwork enriches the understanding of the study site, which helps researchers write research papers and research grants lively and precisely.

2. My Fieldwork in Vietnam

I have several experiences in conducting fieldwork in Vietnam, Sri Lanka, India, and Japan. Last April and May, I collected primary data from 743 ethnic minority households in Vietnam for my project under the Hakubi Center. The main objective was to promote crop insurance for ethnic minority farmers in disadvantaged regions.

To prepare for a field trip, I often make to-do lists for 3 stages: before, during, and after a field trip.

Before the field trip, it is crucial to find a local collaborator. S/he is a key person who helps me to get permission and monitor the survey. It is an ideal situation if the collaborator has a similar background to us and s/he is willing to be a co-author. In this case, we can transfer our research design

easily and s/he has a strong motivation to collect high-quality data.

You might outsource data collection to an organization/company; however, I recommend you visit the field and monitor the progress directly.

During the field trip, it is essential to conduct a pilot survey first. You need to test your questionnaire and your hypothesis with a small sample. Sometimes my questionnaire and my initial hypothesis are not suitable for the local context. Thanks to the pilot survey, I revised and developed the questionnaire and research hypothesis.

After the field trip, I often take a note to summarize the good and bad points of my field trip. This helps me to improve future surveys. Additionally, I always keep in touch with my local collaborators and local investigators via SNS (Facebook, Instagram...). For the data cleaning process after the survey, I often contact them to confirm some confusing numbers and information.

3. Fieldwork under and after COVID-19

Because of COVID-19, I could not go to any fieldwork in 2020 and 2021. Luckily, my local collaborators support me a lot with data collection. However, I realize some limitations for remote surveys.

For example, if emergency situations happen in the field, investigators cannot contact me immediately due to no internet connection. They have to make decisions by themselves, which might affect the quality of data collection. In addition, the survey sometimes must be postponed due to COVID-19 outbreaks at the study site.

After COVID-19, I am happy that I can travel and conduct fieldwork. My fieldwork in 2022 has to follow the guidance and restrictions from the local government at the study site. However, everything has been relieved from 2023.

For me, fieldwork is a valuable experience. I really enjoy talking with local people and trying different cultures and cuisines during my field trip. If you have any questions about fieldwork, I am willing to discuss them with you.

Some pictures of my fieldwork in Vietnam

These photos were taken by me, and they can be used for non-commercial purpose.



Interview with ethnic minority women



Study site



Explain our study to ethnic minority women

社会人類学フィールドワークと モオレア島でのロックダウン

三崎舞

第13期 特定助教(人間・環境学研究科)

脆弱なネット回線でなんとか中国の友人と電話をしていたとき、私がモオレア島でのフィールドワークを終えたら雲南市の彼女を訪ねたいと伝えた。新しい感染症で混乱が起きているので、今年前半はやめた方がいいかもしれないとの返答があった。2020年2月のことだった。その翌月、フランスを経由して仏領ポリネシアに初めてのコロナ感染者が出た。それから数日間で島々はロックダウンに陥り、私は下宿していた年配の女性の家からほとんど出られなくなった。彼女は元々咳がひどかったこともあり、美しい自然に囲まれた広い家に私と2人きりであるにも関わらず、すっかり怖気付いて10分おきに石鹸で手を洗っていた。

当時私は博士論文研究のフィールドワークで1年ほどモオレア島に滞在していた。専攻が社会人類学であることから、この



教会の礼拝はロックダウン中に禁止され、代わりにテレビで牧師の説教と少人数による音楽の演奏が放送された。

滞在は研究の枢要であると理解していた。現地のキリスト教とナショナリズム的社会運動の関係を調査するため、滞在先の村にある教会支部の礼拝、日曜学校、饗宴などの様々な活動に参

加し、関係者とのインタビューも行いながら現地の人々との交流を深めた。訪れた当初こそ健康面や言語の未習得で苦労したものの、住めば都というもので、それなりに楽しい生活を送っていた。無限に木から落ちる熟れたマンゴーを齧りながら、教会の手伝いをしたり、現地の女性たちと踊ったりしていた。現地語も堪能になり、お年寄りの集まりに顔を出して世間話をしたりするのも楽しかった。自転車で島の外周の道路を移動していると、たくさんの知り合いに車から声をかけられた。データの収集も順調で、この時は現地の伝統治療に使われる薬草なども調査していた。

そんな時にロックダウンは全くの不測の事態だった。世界中の誰にとっても不測だったとは思いますが、私はとくに当時の世界情勢について無知だった。もともと連絡不精な性格に加え、現地で十分なデータを集めなければいけないというプレッシャー、人類学者として完全に現地生活に没入しなくてはという謎のプロ意識(?)が、島の外の世界と私を断絶していた。研究が軌道に乗ったときにそれを続けることができなくなった不満と、島の脆弱な医療体制に対する不安、それから島の外に出られなくてもなんとかなるだろうという気楽さが織り混ざって、一日のうちに気分が変動することがよくあった。そうしているうちに自身が国籍を持つ日本への交通手段がなくなり、島の感染者数は増え、ロックダウンの出口が見えなくなってきた。今まであまり頻繁に連絡していなかった家族や友人たちがこぞって私に研究を中断して島から出るように勧め、同居していた年配女性への配慮も重なって、少しの罪悪感と共に在住権のあるヨーロッパに移動した。

それが2020年3月末のことで、今に至るまでフィールドには戻れていない。ロックダウンで研究が中断された時は現地に残る意義はないと判断したが、振り返ってみると、家に閉じ込められていた三週間あまりの間に普段は経験できない生活のあ

おわりに

7人のフィールドワークは、調査する国・地域も違えば方法もさまざまであるが、共通点を見つけることができる。まず、現地の人びととの信頼関係が実りあるフィールドワークのために重要であること。Khalili, Vu, 三崎の研究は、人びとの暮らしを観察し、彼らと話さなければ何も始まらない。青柳、大谷、佐藤、西田の調査対象はそれぞれ樹木、遺跡、魚、岩石碑文や文書であるが、現地の人の協力なしには不可能である。利害関係抜きにして、会話や食事、人びととの交流そのものを楽しんでいることが伝わってくる。大谷の場合はさらに、学生を雇用し、現地の人材育成に貢献するという相互利益の協力のあり方がみられる。コロナ禍においても、KhaliliとVuは現地協力者と連携することでデータ収集を続けた。調査地に行けない西田の研究の危機を救ったのは共同研究者のフランス人考古学者であった。人との繋がりが、フィールドに行けない時にもフィールドワーカーを助けてくれることがよくわかる。

しかし、コロナ禍をうまく乗り切ったように見えるこの3人も、フィールドに行かずに研究を続けることには限界があると

り方や人々の考え方が明らかになった。どんな計画倒れの状況もそれなりの学びに変えられるのが人類学フィールドワークの強みかと思う。来年4年ぶりの再会を果たす予定のモオレア島では、何人かの知り合いが亡くなり、知らない赤ん坊が増えた。教会では新しい茅葺き屋根の建物が2棟つくられた。それにしても連絡不精の私がソーシャルメディアや電話で得た情報は限られていて、再訪にあたっての発見は未知数だ。



教会の活動に使われる、手作りの茅葺き屋根の家。



買い物に行く回数が制限され物資の不足も懸念された時、コロナのような災害に影響を受けない伝統的な農業のあり方が再注目された。写真はタロ畑。

口を揃えて言い、コロナによる制約があった時分にも、政情不安定ななかでも、一刻も早くフィールドに戻ろうとした。衛星画像を用いた観測を併用しながら、実際の森の状態を知るには「泥臭い植生調査」が必要であるとする青柳や、考古学あるいは生物学は、対象とするモノや生物がある・いる場に研究者が赴くことが基本であると述べる大谷と佐藤、外部との交流を一切絶って現地生活に没入していた三崎も含め、それぞれのフィールドワークの描写を読むと、そこでしか出会えない人や動植物、事物を求めて、煩雑な手続きも厭わず、過酷な住環境にも適応し、少々危ない橋を渡りながらもフィールドに身を置こうとする姿勢を感じる。五感を働かせて行う調査やインフォーマルなおしゃべりは、Zoomでは代用不可能なのだ。そして、佐藤の「形容し難い多幸福感」という言葉に表れているように、手段であるはずのフィールドワークは、それ自体がフィールドワーカーの人生にとって必要なものとなっていることもまた、私自身大いに共感するところである。

ポスト白眉の日常

Interview with Dr. Knut Woltjen

第4期 特定准教授、在職期間（2013年4月～2018年3月）
2018年4月より京都大学 iPS 細胞研究所 CiRA 准教授

Dr. Knut Woltjen joined the Hakubi Center in 2013 as an Associate Professor. His research focuses on the fields of genetics and biotechnology, with a particular emphasis on induced pluripotent stem (iPS) cells and their applications in functional genomics and personalized medicine. He received his doctorate degree from the University of Calgary in Canada and served as a postdoctoral research fellow at Mount Sinai Hospital, Samuel Lunenfeld Research Institute, before joining Kyoto University. Currently, Dr. Woltjen serves as an Associate Professor at the Department of Life Science Frontiers, Center for iPS Cell Research and Application (CiRA), Kyoto University.

What attracted Dr. Woltjen to the Hakubi Program is the diverse range of researchers from various disciplines, including life science, social science, and humanities, which provides an ideal environment to build his career. He believes that understanding humanity is crucial for scientists because of the essence of discipline. Science focuses on “possibility”, while social science examines the impact of certain activities on human beings. For instance, regarding the issue of reviving dinosaurs, scientists may inquire about how to revive dinosaurs, while social scientists are more interested in the impact of dinosaur revival on human beings. For a mature and responsible scholar, a comprehensive understanding of both perspectives is essential, and the Hakubi Center offers plenty of opportunities for dialogue with peers of diverse expertise.



Dr. Woltjen mentoring internship students in his lab at CiRA as part of the Annual Takuetsu Daigakuin Program in Genome Editing.

During leisure time, Dr. Woltjen actively participates in “mikoshi” (神輿), part of traditional Japanese festival activities known as “matsuri” (祭), to show respect to gods. He also enjoys climbing during the weekends. These activities help him maintain focus, concentrating solely on one thing and preventing distractions. New ideas occasionally come to his mind in these situations. Reading is also a critical part of his free time. Participating in non-academic events, mikoshi and matsuri activities serves as his way of striking the best work-life balance.

Dr. Woltjen offered two critical pieces of advice for future researchers. Firstly, a researcher should be able to follow their heart, doing everything they are eager to do without being restricted by norms, the mainstream, or other’s expectations. Secondly, researchers are urged to read extensively. Reading literature across a wide range of fields, along with actively communicating with peers and the public, helps researchers broadening their horizons. Specifically, science develops rapidly, so reading scientific literature updates one’s state-of-the-art knowledge. Meanwhile, one should not forget past literature in the fields of science or humanities, which can provide insights into the future of human beings by carefully examining their prior activities.

(Shin-Ru Cheng)



Dr. Woltjen poses in tabi and happi as part of the Mikoshi at Kinsatsugu Shrine.

MUSIC



Mai Misaki

An anthropologist recommends..

Music 'Junk' by M83 It presents a mix of rhythmic, catchy pop sound and nostalgic, cheesy 70s tunes. It leaves you with the fresh air after leaving a nightclub on a chilly night, with an illusion of levitating in outer space.

Music 'Noah's Ark' by Cocorosie Mellow, idyllic and sunny sound that sprinkles a hint of dark fairytale. It can perfectly accompany an afternoon nap or a chill drink in the evening.



Shun Satoh

A cognitive scientist recommends..

Game 「Apex Legends」 僕はPCゲーマーで、最近では最盛期は過ぎたゲームですが、Apex Legendsにハマってます。いわゆるFPS（＝一人称視点の銃撃ゲーム）ですが、戦略が重要で論文がリジェクトされたりして心が荒れていると勝てません。余計にストレスが溜まります。オススメです。



Shin-Ru Cheng

An economist recommends..

Book 'Think Again: The Power of Knowing What you don't know' by Adam Grant The book guides readers to find the "truth" and avoid being misled by appearances.

Book 'Hidden Potential: The Science of Achieving Greater Things' by Adam Grant It is a book that offers clear ways for readers to find and unlock their valuable potential.

Recommendations from the 13th batch members

An epidemiologist recommends..

Book 'Book of Why' by Judea Pearl and Dana Mackenzie This book is an exploration of the science of causality, delving into how humans think about causes and effects, and how modern technology can expand our understanding of cause-and-effect relationships.

Book 'The 7 Habits of Highly Effective People' by Stephen R. Covey. This book is a guide to personal and interpersonal effectiveness based on principles of character and ethics, detailing seven habits that foster growth, communication, and proactive behavior.



Kosuke Inoue

An astrophysicist recommends...

Book 'Course of Theoretical Physics' by Landau and Lifshitz This series may be extremely difficult but you can learn a lot about sophisticated physics.

Book 'The Story of the Roman People' by Shiono Nanami After reading this book, my travel to Mediterranean countries became much more enjoyable.



Tatsuya Matsumoto

BOOKS



Ha Thu Vu

An economist recommends....

Book ‘Mastering Metrics’ by Joshua D. Angrist (a Nobel Prize Economist in 2021) and Jörn-Steffen Pischke. This book presents key econometric tools to estimate causal effects through various realistic case studies.

Videos <https://mru.org/courses/mastering-econometrics/path-cause-effect> by Joshua D. Angrist These videos were developed by Joshua D. Angrist, a Nobel Prize Economist in 2021 to demonstrate five econometric approaches through Kungfu anime.



Naritaka Oshita

A theoretical physicist recommends..

Movie ‘Hawking’ by Philip Martin This is a biographical picture about a famous physicist Stephen Hawking that describes how physicists and mathematicians in the past attacked the problem of cosmology.

Book ‘物理学への道程’ by Shin’ichiro Tomonaga A Japanese essay written by a Nobel Prize physicist Shin’ichiro Tomonaga that describes the essence of quantum and particle physics and his memory of his research life.



Mari Ohnuki

A stem cell biologist recommends..

Book 「ネアンデルタール人は私たちと交配した」 Svante Pääbo著 ネアンデルタール人のゲノムを解読し、2022年ノーベル医学生理学賞受賞者を受賞したスヴァンテ・ペーボ博士。彼が歩んできたサイエンスの道のりと個人的な歩みを、ユーモアを交えたわかりやすい文章で本人が記録。堅実な研究の姿勢が、やがてドラマティックな結果を生み出していく描写に勇気づけられます。タイトルには少々ぎょつとしますが。

Book 「竜馬がゆく」 司馬遼太郎著 幕末ファンでも歴女でも何でもない、それまで歴史小説に全く縁がなかった私が、引き込まれて全巻読んでしまった理由の一つは、舞台が身近にも程があったから。川を隔てた職場の向かい側で、毎日通るあの路で、昨日食事したあの場所で...「聖地」だらけの京都にいるからこそより味わえる、ここが歴史の大舞台だということを改めて実感させてくれる物語。

ユーモアを交えたわかりやすい文章で本人が記録。堅実な研究の姿勢が、やがてドラマティックな結果を生み出していく描写に勇気づけられます。 Mari on 「ネアンデルタール人は私たちと交配した」

A comparative psychologist recommends..

Book ‘Phantoms in the Brain: Probing the Mysteries of the Human Mind’ by V. S. Ramachandran and Sandra Blakeslee In this book, neuroscientist Dr. Ramachandran described their work with patients with bizarre illusions about their body parts (e.g., a painful phantom limb that still functions in the brain) and how these could be used to study how brain works, including topics of body part representation, movement control, decision making, and the formation of philosophy.

Book ‘Ryōkan the Great Fool’ by Misao Kodama and Hikosaku Yanagishima This is a book telling the unconventional life story of Ryōkan, a Sōtō Zen Buddhist monk, with many of his poems, showing an essence of Zen in life.



Gao Jie

COMICS



Teppei Takamatsu

A mathematician recommends

Comic 「金色のガッシュ!!」 ("Zatch Bell!") by Makoto Raiku This manga, which was popular when I was in elementary school, is an incredibly exciting battle manga and also the work that introduced me to the significant theorem in number theory known as "Fermat's last theorem" for the first time.
Book 「オイラーの贈物—人類の至宝 $e^{i\pi}=-1$ を学ぶ」 by Takeshi Yoshida This is the first math book I have read that explains Euler's formula and many other topics in an easy-to-understand way for high school students.

This is the first math book I have read that explains Euler's formula and many other topics in an easy-to-understand way for high school students. Teppei on 「オイラーの贈物—人類の至宝 $e^{i\pi}=-1$ を学ぶ」



Tomoka Mushiga

A scholar of Indian religion recommends...

Youtube channel 'darbarfestival' by Darbar Arts Culture & Heritage Trust This is managed by Darbar Arts Culture & Heritage Trust (UK), which promotes Indian classical music globally and holds an annual big concert, Darbar Festival. You can enjoy the pieces of beautiful music performed by the current top Indian artists.

Book 'Different Animals, Different Solutions: Comparative Views on Animal Parenting!' (正解は一つじゃない 子育てする動物たち) This book provides the ways of parenting of various animals described by specialists of each animal. As you are surprised, impressed, envious, and loving of how animals raise their children, you can consider your concerns about child-raising from a broader perspective. Learning the similarities and differences between humans and other animals is also enjoyable.



Amane Tajika

A paleontologist recommends...

Documentary 'Prehistoric Planet' by BBC This is a nature documentary series produced by the BBC that focuses on life in Earth history. The most "realistic" reconstruction of ancient animals is presented here. Available on Apple TV.

Book 'Squid Empire: The Rise and Fall of the Cephalopods' by Danna Staaf This is a book written by Danna Staaf who was a cephalopod biologist. The book describes the evolution of cephalopods in a fun and interesting manner. If you want to know a little about one of the weirdest animals on Earth, this is a book to read.

If you want to know a little about one of the weirdest animals on Earth, this is a book to read.

Amane on 'Squid Empire: The Rise and Fall of the Cephalopods'

A neurobiologist recommends..

Podcast ‘Huberman lab’ by Andrew Huberman This is a podcast by a famous neuroscientist Andrew Huberman that covers all fields of science and is filled with practical everyday tips to improve your life.

Book ‘Leadership and Self-Deception: Getting out of the Box’ This is a book that helps you to thrive at work and at home by dramatically improving your interpersonal skills through breaking out of the relentless loop of self-justification.



Misa Arizono

A chemist recommends....

TV series ‘Black Mirror’ by Charlie Brooker This is a television series that features Scifi. The end of the stories are unexpected consequences of new technologies.

Book ‘Romance of the Three Kingdoms’ by Guanzhong This is a book of the three kingdoms period in Chinese history. The story combines elements of factual history with fictional narratives, offering readers traditional wisdom, rich historical details, and profound insights into strategic thinking.



Tomoko Inose

A political anthropologist recommends..

Book ‘Why Nations Fail: The Origins of Power, Prosperity, and Poverty’ by Daron Acemoglu and James A. Robinson This is a book by economists Daron Acemoglu and James A. Robinson exploring the question of why some countries have progressed rapidly while several others failed. Is it because of the culture, the weather, or geography? The authors reject the influence of any of these elements and conclusively show that it is man-made political and economic institutions that underlie economic success (or lack of it).

Book ‘The Human Swarm: How Our Societies Arise, Thrive, and Fall’ by Mark W. Moffett In this paradigm-shattering book, biologist Mark W. Moffett draws on findings in psychology, sociology, and anthropology to explain the social adaptations that bind societies. He explores how the tension between identity and anonymity defines how societies develop, function, and fail.



Mostafa Khalili

This is a book exploring the question of why some countries have progressed rapidly while several others failed.

Mostafa on ‘Why Nations Fail: The Origins of Power, Prosperity, and Poverty’



Aya Nakama

An art historian recommends...

Book ‘History of Art’ by H. W. Janson’ This is a classic overview of art history written by H. W. Janson, which dynamically illustrates the historical evolution of concepts of space, time and society through works of art and their styles.

Book ‘Gothic Art: Glorious Visions’ by Michael Camille This is a groundbreaking book on Western medieval visuality written by Michael Camille, which reveals the importance of light in the spiritualized perception of the world by exploring gothic art.

MOVIES



Miki Kadota

A jurist recommends..

Movie ‘Nocturnal Animals’ by Tom Ford This is a psychological thriller film by Tom Ford. Susan, who owns an art gallery, receives a manuscript of a novel by her ex-husband, Edward, who she left unfaithfully. She becomes fascinated by the sophisticated but also violent novel of him. This movie is not only refined in an artistic way, but also encourages us to believe in what I love in our lives, whatever the relationship with others or profession.

Book ‘Speech Out of Doors’ by Timothy Zick This is an academic book by Timothy Zick on freedom of assembly and other public expressive activities. This book focuses on the central role public spaces play for assemblies in the time of privatization and surveillance of these places in a simple and understandable description with a restrictive use of legal terms.

A neuroscientist recommends..

Comic ‘Ghost in the Shell’ (攻殻機動隊) by Masamune Shirow This comic is a science fiction work by Masamune Shirow that focuses on BMI (Brain Machine Interface) technology that connects the brain to external devices and continues to influence many researchers even more than 30 years after its publication.

Ballet ‘The Nutcracker’ (くるみ割り人形) Created based on E.T.A. Hoffmann's fairy tale "The Nutcracker and the King of the Mice," this is one of the most popular classical ballet performances, and the dancing and music by the various ballet companies always inspire me.



Naho Konoike

A political scientist recommends...

Youtube Podcast ‘Geopolitical Economy Report’ by Ben Norton This YouTube Podcast ([youtube.com/@GeopoliticalEconomyReport](https://www.youtube.com/@GeopoliticalEconomyReport)) by journalist and researcher Ben Norton very usefully summarises and analyses current events under a leftist lens with particular focus on the developing world and an anti-colonial spin. Highly recommended if you want some out of the box news about world affairs.

Book ‘The Tragedy of Ukraine’ by Nicolai Petro This book by US academic Nicolai Petro was published in December 2022 and analyses the Russo-Ukrainian war in a most useful way, focusing on the various interlinking conflicts and making the argument that the war is best understood under the paradigm of an ancient greek tragedy, rather than a fight between good and evil.



Pascal Lottaz

A political ecologist recommends...

Book ‘Energy and Civilization’ by Vaclav Smil
A monumental and comprehensive account of the influential role of energy in human history, from primitive society to modern day ‘fossil-fueled’ civilization. The book is loaded with facts and statistics that help contextualise the ecological crisis we are faced with today.

Book ‘Marx in the Anthropocene’ by Kohei Saito
One of the most influential and hotly debated books on ecology and political economy approached from a Marxist lens. The book raises fundamental questions on the way we live and ‘develop’. Worth a read no matter where one lies in the political spectrum.



Julie De los Reyes

The book raises fundamental questions on the way we live and ‘develop’. Worth a read no matter where one lies in the political spectrum.

Julie on ‘Marx in the Anthropocene’

活動紹介

2023年度 白眉離任式

第13期 医学研究科 特定准教授 井上 浩輔

白眉研究者として5年の歳月を過ごされた先生方を送り出すべく、2023年度 白眉離任式が2023年9月6日(水)に国際科学イノベーション棟にて行われました。湊 長博総長、時任 宣博理事、高倉 喜信センター長をはじめ、白眉プロジェクトの運営に尽力してくださっている多くの先生方にお越しいただき、厳かでありながらも和やかな雰囲気の中、離任式が執り行われました。今回の離任式では、第8期・第9期白眉研究者7名(発表順)が登場しました。

- ☆ 鈴木 俊貴さん「白い眉毛のシジュウカラ」"The Hakubi Bird"
- ☆ 鈴木 雄太さん「タンパク質デザインによるバイオナノロボットの創成を目指して」"Protein Design and Engineering Toward the Creation of Bionanorobot"
- ☆ 井上 恵美子さん「持続可能な発展に向けて：イノベーションと政策の果たす役割」"Towards Sustainable Development: the Role of Innovation and Policy"
- ☆ カネラ アンドレスさん "Topological Problems in the DNA during Genome Organization as Sources of Chromosome Instability."
- ☆ 小川 敬也さん「再生可能エネルギー由来のアンモニアを利用した水素社会の基盤構築」"Fundamental Study of Hydrogen Economy Using Ammonia Synthesized by Renewable Energy"
- ☆ 檜山 智美さん「シルクロードの歴史のかけら：西域の仏教石窟寺院の壁画の研究」"Fragmented Pieces of Silk Road History: A Study on the Wall Paintings in Buddhist Rock-carved Monasteries in Kucha and Dunhuang"

- ☆ 水本 憲治さん「コロナ流行に対する感染症疫学者の役割とこれから」"The Role and Future of the Infectious Disease Epidemiologist for COVID-19 Epidemic"

白眉研究者ならではの、多岐にわたるテーマについて発表が行われました。質疑応答も盛り上がり、異分野に触れることの楽しさや、融合することの面白さ・斬新さを体感する会となりました。

離任式の後には、意見交換会が行われました。期をまたいで交流することで、白眉研究者間の縦と横のつながりを深めることができ、大変有意義な会となりました。改めまして離任された先生方、素晴らしい発表をありがとうございました。新天地での益々のご活躍を祈念いたします。

(いのうえ こうすけ)



白眉の日 (Hakubi Day) The 13th Batch, Graduate School of Economics, Assistant Professor Vu Ha Thu

Hakubi Day is held every year to become a place for interaction among all Hakubi researchers, Hakubi staff, and their families. This year, Hakubi Day was held on August 5th at KKR Kyoto Kuniso. We were glad to welcome Prof. Takayama Yoshinobu- Hakubi director and three presenters: Dr. Kaide Yusuke (11th batch), Dr. Shigemori Masaki (4th batch), and Dr. Ando Yuichiro (7th batch). We also welcomed around 30 Hakubi members and their families attending the event.

An opening remark was made by Prof. Takayama Yoshinobu- the Hakubi director. Then, Dr. Kaide Yusuke presented his research, the title was "How to deal with global-scale problems: Introduction to international law research". Dr. Kaide Yusuke was the 11th batch of Hakubi. Currently, he is working at the Hokkaido University. The second presenter was Dr. Masaki Shigemori. His presentation was about "Microstructure of black holes and string theory". Dr. Masaki was the 4th batch of Hakubi. Currently, he has been working at the Nagoya University. The last presentation was given by Dr.

Ando Yuichiro. The title was "Room temperature operation of semiconductor-based spin devices for beyond CMOS technology." Dr. Ando was the 7th batch of Hakubi, he has been working at the Kyoto University.

After the presentation session, we played "catch the word" and "bingo" games. Finally, all Hakubi members and their families enjoyed a BBQ at the rooftop of KKR Kyoto Kuniso. Hakubi Day 2023 was a memorable day for all of us. We enjoyed three presentations, games, and dinner. We wish all the best to Hakubi members and their families.

(Vu Ha Thu)



白眉セミナー

白眉センターでは原則として8月を除く月2回(第1・3火曜日 16時45分より)セミナーを開催しています。各研究者が順番に企画担当者となり、様々なトピックについて議論が行われます。2011年度からは通常英語で発表・質疑応答を行っています。以下に2022年度下半期～2023年度上半期のセミナー情報を掲載します。

2022年

- ◆第225回 白眉セミナー 2022年10月4日(火)
下林俊典 (iPS細胞研究所 准教授)
「Nucleation and surface fluctuations of biomolecular condensate」
- ◆第226回 白眉セミナー 2022年10月18日(火)
白眉ってなんだ? 第1回白眉研究者・学生交流セミナー
- ◆第227回 白眉セミナー 2022年12月20日(火)
白眉ってなんだ? 第2回白眉研究者・学生交流セミナー

2023年

- ◆第228回 白眉セミナー 2023年1月10日(火)
白眉ってなんだ? 第3回白眉研究者・学生交流セミナー
- ◆第229回 白眉セミナー 2023年5月16日(火)
三崎 舞 (第13期 人間・環境学研究科 特定助教)
「人と土地のつながりの社会変容における可能性: 仏領ポリネシアにおける先住民伝統文化の復興活動の人類学研究」
- ◆第230回 白眉セミナー 2023年6月6日(火)
虫賀 幹華 (第13期 文学研究科 特定助教)
「前近代と近代におけるヒンドゥー教の連続性と非連続性—聖地と聖地巡礼の発展史から」
- ◆第231回 白眉セミナー 2023年6月20日(火)
有菌 美沙 (第13期 医学研究科 特定准教授)
「脳の影の主役アストロサイトがつなぐ新しい神経回路」
- ◆第232回 白眉セミナー 2023年7月4日(火)
CHENG Shin-Ru (第13期 法学研究科 特定助教)
「Harmonization of Competition Laws for Cross-Border Digital Trade in Asia: From the View of Economic Analysis of Law.」
- ◆第233回 白眉セミナー 2023年7月18日(火)
VU Ha Thu (第13期 経済学研究科 特定助教)
「How to leverage social networks to promote farmer's adoption of agricultural technologies? Evidence from field experiments in developing countries.」
- ◆第234回 白眉セミナー 2023年9月5日(火)
井上 浩輔 (第13期 医学研究科 特定准教授)
「高ベネフィットアプローチ: 次世代の個別化医療における機械学習を用いた効果の異質性評価」
- ◆第235回 白眉セミナー 2023年9月19日(火)
門田 美貴 (第13期 法学研究科 特定助教)
「憲法上の自由と空間へのアクセス保障」

- ◆第236回 白眉セミナー 2023年10月3日(火)
KHALILI Mostafa (第13期 東南アジア地域研究研究所 特定助教)
「Understanding Ethnonationalistic Mobilizations from Below: Identity Politics Above and Beyond Ethnicity」
- ◆第237回 白眉セミナー 2023年10月16日(月)
GAO Jie (第13期 野生動物研究センター 特定助教)
「From monkeys, chimpanzees, to ungulates: comparative cognition」
- ◆第238回 白眉セミナー 2023年11月7日(火)
鴻池 菜保 (第13期 ヒト行動進化研究センター 特定准教授)
「Development of a method to call directly to the monkey brain and elucidation of the neural mechanism of auditory hallucinations in schizophrenia」
- ◆第239回 白眉セミナー 2023年11月21日(火)
LOTTAZ Pascal (第13期 法学研究科 特定准教授)
「Neutrality Studies」
- ◆第240回 白眉セミナー 2023年12月19日(火)
仲間 絢 (第13期 文学研究科 特定准教授)
「History of art for human creativity and imagination: Representation of the Virgin Mary in the bridal mysticism」

センター日誌 (2022年10月4日～2023年12月31日)

2022年		7月1日	Jie GAO、松本達矢 (以上、特定助教) 着任
10月4日	第225回 白眉セミナー	7月4日	第232回 白眉セミナー
10月18日	第226回 白眉セミナー	7月18日	第233回 白眉セミナー
11月30日	Bahareh KAMRANZAD (特定助教) 離任	7月20日	白眉プロジェクト年次報告会
12月2日	第13期 伯楽会議	7月31日	★張哲維 (特定助教) 離任
12月12日	第35回 運営委員会	8月5日	白眉の日 (第13回 白眉ホームカミングデー)
12月20日	第227回 白眉セミナー	8月31日	宇賀神知紀 (特定助教) 離任
12月31日	高橋重成 (特定准教授)、★小川敬也 (特定助教) 離任	9月5日	第234回 白眉セミナー
2023年		9月6日	白眉離任式
1月10日	第228回 白眉セミナー	9月19日	第235回 白眉セミナー
2月18日	白眉合宿 (~ 19日)	9月30日	井上恵美子、カネラ アンドレス、野村龍一 (以上、特定准教授)、檜山智美、鈴木雄太 (以上、特定助教) 離任
2月28日	杉村和幸 (特定助教) 離任	10月1日	田近周 (特定助教) 着任
3月22日	第36回 運営委員会 (~ 27日)	10月3日	第236回 白眉セミナー
3月31日	赤松明彦 (センター長)、馬場基彰、★水本憲治 (以上、特定准教授)、鈴木俊貴、坂部綾香、水本岬希、★馬場弘樹 (以上、特定助教) 離任	10月16日	第237回 白眉セミナー
4月1日	高倉喜信 (センター長)、有蘭美沙、井上浩輔、猪瀬朋子、鴻池菜保、仲間絢、Pascal LOTTAZ (以上、特定准教授)、Ha Thu VU、大下翔誉、大貫茉里、門田美貴、Mostafa KHALILI、佐藤駿、Shin-Ru CHENG、高松哲平、Julie Ann DELOS REYES、三崎舞、虫賀幹華 (以上、特定助教) 着任	11月7日	第238回 白眉セミナー
4月12日	公募情報公開	11月19日	第14期 伯楽会議
5月10日	公募受付開始	11月21日	第239回 白眉セミナー
5月16日	第229回 白眉セミナー	12月1日	第37回 運営委員会
6月6日	第230回 白眉セミナー	12月4日	白眉合宿 (~ 5日)
6月20日	第231回 白眉セミナー	12月19日	第240回 白眉セミナー

★卓越研究員

受賞

- ・包含 (12期・情報学研究科・特定助教)
 - 船井研究奨励賞、船井情報科学振興財団、2023年3月16日
- ・井上 浩輔 (13期・医学研究科・特定准教授)
 - 若手研究奨励賞 (YIA)、日本内分泌学会学術総会 (Japan Endocrine Society)、2023年6月3日
 - 医学研究奨励賞、日本医師会、2023年9月19日
 - Clinical Investigator Award、臨床医学研究塾、2023年10月21日
 - Innovators Under 35 Japan 2023、MIT Technology Review、2023年11月10日
- ・松本 徹 (12期・理学研究科・特定助教)
 - 2022年度日本鉱物科学会研究奨励賞、一般社団法人日本鉱物科学会、2023年9月15日
- ・田辺 理 (11期・文学研究科・特定准教授)
 - 第35回国華奨励賞、國華社・朝日新聞社、2023年10月26日
- ・小俣ラポー日登美 (12期・人文科学研究科・特定准教授)
 - 第45回サントリー学芸賞、サントリー文化財団、2023年11月15日
- ・中村 栄太 (10期・情報学研究科・特定助教)
 - Best Paper Award、The 16th International Symposium on Computer Music Multidisciplinary Research、2023年11月17日

出版物

- ・小俣ラポー日登美 (12期・人文科学研究科・特定准教授)
 - 『殉教の日本—近世ヨーロッパの宣教のレトリック』、名古屋大学出版会、2023年2月28日
 - 寄稿『岩波書店 世界歴史 第15巻 主権国家と革命 15～18世紀』、岩波書店、2023年3月
- ・慶 昭蓉 (12期・人文科学研究科・特定准教授)
 - 共著『Ancient Central Asian Writings in the National Museum of Korea II—Written Materials Excavated from the Tarim Basin』、韓国国立中央博物館 (National Museum of Korea)、2022年12月16日
(共著: CHING Chao-jung, OGIHARA Hirotochi, KITSUDO Koichi, YAJIMA Yoichi, Cristina SCHERRER-SCHAUB, KWON Youngwoo)
- ・門脇 浩明 (11期・農学研究科・特定准教授)
 - 翻訳『ミッテルバッハ・マギル群集生態学』ミッテルバッハ・マギル著、丸善出版、2023年2月17日
(共著: 門脇浩明・山道真人氏・内海俊介氏)
- ・田辺 理 (11期・文学研究科・特定准教授)
 - 『ガンダーラの高級娼婦たち—ガンダーラの仏教彫刻に表現された貴婦人像のモデルを求めて—』、柳原出版、2022年11月30日
 - 『ガンダーラの仏教彫刻と生天思想』、中央公論美術出版、2022年12月7日
- ・Pascal Lottaz (13期・法学研究科・特定准教授)
 - Neutral Europe and the Creation of the Nonproliferation Regime 1958-1968、Routledge、2023年11月

メディアでの紹介・出演

- ・門脇 浩明 (11期・農学研究科・特定准教授)
 - JST取材、サイエンス ウィンドウ『森林生態系を支える菌根菌ネットワーク (地面の下のたからもの)』
2023年6月21日
- ・東島 沙弥佳 (12期・総合博物館・特定助教)
 - インタビュー記事、『ザッツ・京大』掲載、2023年2月22日
 - 登壇した対談動画「文理の森」(京都大学人と社会の未来研究院・制作)の公開、2023年3月7日
 - 朝日新聞に取材協力した記事の掲載、2022年12月24日
 - 執筆論文に関するJST海外向け科学ニュースサイトでの紹介、2022年11月
- ・Pascal Lottaz (13期・法学研究科・特定准教授)
 - 共著 Neutrality Article が Foreign Policy Magazine に掲載、2023年6月6日

ハイライト

小俣ラポー日登美特定准教授が第45回（2023年度） サントリー学芸賞を受賞

小俣ラポー日登美特定准教授（人文科学研究所）の著書『殉教の日本——近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』（名古屋大学出版会）がサントリー学芸賞を受賞しました。

サントリー学芸賞は、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究・評論活動を、著作を通じて行った個人を顕彰する賞で、1979年の創設以来、受賞者の業績は、主題への斬新なアプローチ、従来の学問の境界領域での研究、フロンティアの開拓などの点で高く評価されています。既存の枠組にとらわれない自由な評論・研究活動に光を当てることは、本賞の重要な役割となっています。受賞式は、2023年12月11日に東京にて開催されました。

本書概要

16世紀末から日本列島で見られたキリスト教徒への迫害とその殉教は、同時代の西欧カトリック社会内部で語られ、描かれ、さらには文芸のモチーフとして反復される中で類型化された文化的表象へと昇華し、そして歴史的な記憶となりました。この長期の過程を、宣教報告・殉教事件の検証裁判資料といった手稿の一次資料、それに基づいた刊行物、イメージ、文学作品といったヨーロッパの複数の言語圏にわたる多様な二次・三次資料の分析を通じて明らかにしようと試みたのが本書です。この記憶は、明治期以降の日本では西欧的価値観と共に広く受容され、その結果、殉教者の栄光の過去は、日本の歴史およびアイデンティティの一部ともなっていました。時代・言語圏・文化圏をまたがり歴史的言説は往還し、過去の記憶の形成そのものが、その歴史文化の交錯を体現しているのです。殉教言説の構築過程の顕彰は、このような歴史のダイナミズムを明らかにするためには、まさに好適な題材であったと言えるでしょう。



本書の選評：<https://www.suntory.co.jp/news/article/14496-3.html>
(サントリー文化財団ニュースリリース)

白眉センターの詳細はこちらから

白眉センターホームページ



白眉プロジェクト公式 YouTube チャンネル



第13期白眉研究者



●有菌 美沙
医学研究科
脳の影の主役アストロサイトがつかぬ新しい神経回路
京都大学 医学研究科



●井上 浩輔
医学研究科
生活習慣病における真の個別化医療の実現
京都大学 医学研究科



●猪瀬 朋子
高等研究院 物質 - 細胞統合システム拠点 (iCeMS)
表面分子修飾ナノワイヤーを用いた単一細胞手術法の実現
京都大学 高等研究院 物質 - 細胞統合システム拠点



● Vu Ha Thu
Graduate School of Economics
Impacts of Network-based Interventions on Farmers' Adoption of Agricultural Technologies: Evidence from Field Experiments in Developing Countries
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University



● 門田 美貴
法学研究科
憲法上の権利の「前域」保障——「萎縮」からの憲法的保護
慶應義塾大学大学院 法学研究科



●大下 翔誉
基礎物理学研究所
ブラックホールの揺らぎに関する理論研究 — ブラックホール振動による重力理論の高精度検証を目指して—
理化学研究所



●大貫 茉里
高等研究院 ヒト生物学高等研究拠点 (ASHBi)
霊長類特異的転移因子によるヒト幹細胞運命決定遺伝子の進化
京都大学 高等研究院 ヒト生物学高等研究拠点



★ Mostafa KHALILI
Center for Southeast Asian Studies
Understanding Ethnonationalistic Mobilizations from Below: Identity Politics Above and Beyond Ethnicity
Center for Relational Studies on Global Crisis, Chiba University



● Jie GAO
Wildlife Research Center
Four-legged intelligence: how domestic animals see the world
Center for Information and Neural Networks, Advanced ICT Research Institute, National Institute of Information and Communications Technology



●高松 哲平
理学研究科
混標数の幾何学による既約シンプレクティック多様体の数論の研究
京都大学大学院 理学研究科



●鴻池 菜保
ヒト行動進化研究センター
サル脳内に直接語りかける手法の開発と統合失調症における幻聴のメカニズム解明
京都大学ヒト行動進化研究センター



●佐藤 駿
理学研究科
魚類における社会的知性と協力の統合的理解
総合研究大学院大学 統合進化科学センター

名前
受入部局
研究課題
前職

● GL: グローバル型 (従来型)
★ TT: 部局連携型 (卓越研究員型)



● Shin-Ru CHENG
Graduate School of Law
Harmonization of Competition Laws for Cross-Border Digital Trade in Asia: From the View of Economic Analysis of Law
Graduate School of Law, Kyoto University



●田近 周
人間・環境学研究科
白亜紀末大量絶滅事変における海洋酸性化イベントの復元による頭足類絶滅メカニズムの解明
東京大学総合研究博物館・チューリッヒ大学古生物学研究所



● Julie Ann DE LOS REYES
東南アジア地域研究研究所
低炭素移行への資金融資：東南アジアの脱炭素化を支援する日本の「グリーン成長戦略」の再編成
京都大学 東南アジア地域研究研究所



●仲間 絢
文学研究科
西洋中世における聖母マリアの表象とその女性性
ハーバード大学大学院美術・建築史研究科



●松本 達矢
理学研究科
将来観測を見据えた汎用性の高い突発天体解析手法の完成とその応用による天体爆発現象の究明：ブラックホールや中性子星などの極限天体はどのような星から誕生し多様な宇宙の爆発現象を引き起こすのか？
コロンビア大学 物理学科



●三崎 舞
人間・環境学研究科
人と土地のつながりの社会変容における可能性：仏領ポリネシアにおける先住民伝統文化の復興活動の人類学研究
オックスフォード大学



●虫賀 幹華
文学研究科
前近代と近代におけるヒンドゥー教の連続性と非連続性—聖地と聖地巡礼の発展史から
日本学術振興会／京都大学大学院文学研究科



● Pascal LOTTAZ
Faculty of Law
Neutrality in International Relations
Waseda University, Institute for Advanced Study

『白眉センターだより』第21号

2024年2月29日発行
編集・発行 京都大学白眉センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL: 075-753-5315 FAX: 075-753-5310
Eメール: hakubi@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/
印刷 株式会社 サンワ
©2023 The Hakubi Center, Kyoto University

表紙写真：ギリシャ共和国にて2014年撮影、撮影者：大貫茉里
中表紙写真：タンザニアにて2016年撮影、撮影者：Jie GAO